

年報

第23号
(平成30年度)

特集

教化活動の可能性

～これまでを知り、これからを探る～

智山教化センター

I 緒言	1
II 平成30年度教化目標(わたしたちの目標)の推進	4
A. 研修・講習会の開催	4
B. 教区等の活動について	11
C. 各種講習会等の出講について	13
D. 出版物と教化資料・教材	14
III 教化推進レポート	16
特集教化活動の可能性～これまでを知り、これからを探る～	
1 真言宗智山派における教化活動の黎明Ⅱ	
一つくしあい運動の展開 50年後の視点から一	16
2 人口減少社会の光と影	
～教化の可能性を探る	28
3 教区における通称御詠歌オペラの展開	
一上総第三教区の事例一	35
4 「教化を考える会」について	
	38
IV その他	40
・ 購入図書 宗内寺院・教会刊行物 寄贈図書・資料	40
・ 智山教化センターの役割と活動／智山教化センター構成員	…… 裏表紙

I 緒言

智山教化センター センター長 山川 弘巳

「教化とは、本宗の教義を宣布し、檀信徒が安心を体得することを目的とする、行法、法要儀式、言説、詠歌、放送、文書、映像、及び各種事業の他、時宜に適した方法で行う伝道をいう」

ご存知のとおり、これは本宗教化規程第一章第一条にある教化の定義です。この定義は、①真言宗智山派の教義を宣布すること②檀信徒の安心体得を目的とすること③時宜に適した方法で伝道することの3つがポイントです。智山派の教師資格を取得しているものは、この3つを実践することが基本であり、目標でもあります。教義を正しく理解し、自らのみならず檀信徒の安心体得を目的とし、時宜に適した伝道方法を身につけ実践することが求められているのです。

(『年報』第2号より要約抜粋)

以上をふまえて、本宗では、現在の教化目標(わたしたちの目標)「生きる力ー仏さまに祈り、仏さまと出会う」を平成29年度に設定しました。そして、教化目標を実現するための具体的取り組みとして、推奨する教化活動(以前は、取り組みを強調する教化活動)を各場面(年中行事や葬送儀礼など)で取り入れることを提案し、檀信徒の安心体得を目指しています。

そこで、平成30年度の智山教化センターの事業内で得た知見をもとに、現在の教化目標が2年経過したところでの所感を加えて、緒言にかえさせていただきます。

信頼と信仰

平成30年度智山教化センター所内の研究会「教化を考える会」と智山伝法院開設講座「寺院活性化論」でお招きした松本勇輝先生(全日本葬祭業協同組合〈以下:全葬連〉専務理事)からいただいた資料によると、国民生活セン

ターや全葬連の消費者相談には、遺族が葬儀について右も左もわからない状況にも関わらず、その状況に理解を示さない僧侶の対応から、僧侶への不信感や苦情が数多く寄せられています。消費者相談という性格上(葬儀を消費行為として取り上げることも問題ですが)、金銭面(布施)に絡んだ相談が多いのですが、その根底した問題には、僧侶(菩提寺の僧侶のみならず派遣僧侶も含む)と一般社会の方々(檀信徒及び消費者)とのコミュニケーション不足、あるいは遺族の悲しみを理解できない希薄な関係性が少なからず存在することが読み取れます。本宗の住職・教師が、苦情を寄せられるような対応をとられているとは思いませんが、檀信徒を始めとする一般の方々への普段からの対応が、如何に重要なのかを物語っているのだと改めて認識しました。

教化活動の前提には、信頼関係が築かれていないければ成り立たない。僧侶の一拳手一投足が教化活動や信仰へつながる。

当たり前のようにですが、私たち住職・教師が、本宗の教義、弘法大師の教え、お釈迦さまの高邁な思想を人々に伝え安心へと導く教化活動に心血を注いで実践したとしても、私たち自身が信用に値する生活を送らず、檀信徒へ真摯な対応をとっていないのではないでしょうか。そしてそれが際立って露呈されるのが、葬儀における遺族や檀信徒への対応なのだと思います。遺族や檀信徒が初めて喪主を務め不安な時に、住職・教師からの心無い一言で、傷つくこともあるのです。ですから、この時の対応如何で、その後の遺族や檀信徒との関係が変わってしまいます。国民

I

緒
言

生活センターや全葬連に寄せられる相談は、まさしく対応不備によりその後の教化活動が成り立たない事例として受け取りました。

また、核家族の社会で「家族葬」という小規模な葬儀の形や言葉が定着しつつある現状で、身内を送る葬儀として、自らが喪主や親族となり、枕飾りから葬儀を準備し作り上げてゆく経験が少なくなり、結果、かつて地域や家庭の中で自然に身につけていたであろう葬儀を始めとする仏事の意味や意義が伝わり難くなりました。そしてそれが、送られる側の世代（故人）と送る側の世代（遺族）の仏教や菩提寺に対する意識の差を生み、そのまま前述の不満の相談につながっているのではないかとも思うのです。

説明と体験

本宗では平成25年度より「仏事がわかるリーフレット」を発行してきました。智山教化センターは、その企画編集を担当しています。平成30年度には、Vol.09『両祖大師とご宝号—お唱えしようご宝号一』とVol.10『感謝の心と葬儀—亡き人に捧げる祈りと供養—』を発行しました。これによって、10種類のリーフレットが出版されました（ちなみに10種類は「ご法事」「お護摩」「お施餓鬼」「お盆」「光明真言」「お戒名」「お彼岸とお墓参り」「お塔婆」「両祖大師」「葬儀」です）。「仏事がわかるリーフレット」の発行当初の目的は、寺檀関係の強化、檀信徒の信仰増進にありました。そして想定した具体的な使用方法は、あらゆる場面での配布と法話の補助資料でした。しかし、前項で申し上げましたとおり、家庭内における仏事の継承がままならない現状では、菩提寺の教師が仏事について丁寧に説明してゆくことが求められています。したがいまして、「仏事がわかるリーフレット」は、その説明資料として活用することもできます。

一例えば、葬儀の相談の時に「お戒名」「葬儀」のリーフレットを利用し説明する。葬儀終了後に「ご法事」「お塔婆」で年回忌法要について説明する。年中行事の「お盆」「お彼岸」「お施

餓鬼」が近づけば事前に説明する。多人数に向けて説明するというよりは、少人数に向け膝を交えて説明する方が効果的。—

このように資料を活用し、檀信徒に丁寧に説明してゆくそのひとつひとつの行動が、檀信徒からの信頼へつながってゆくのではないかでしょうか。

一方、檀信徒が仏事の理解を深めるためには、意味や意義を知るばかりではなく、その仏事を体験していただくことが必要です。また、仏事を入口とし、真言宗の教えや仏教への理解を深めることで、檀信徒が安心を体得できるのです。そのために具体的な実践行である推奨する教化活動を体験していただくのと同時に、その意味や意義を伝えなければなりません。

檀信徒に仏事や写経などの教化活動の内容を説明し、自ら体験してもらう。それが、安心体得への一歩になる。

一例えば各末寺では、檀信徒に「仏事がわかるリーフレット」を配布して、日常の仏事の実践を勧める。そして、檀信徒の信仰心を涵養するためにさらに教化活動を展開する。そのためには「教化活動リーフレット（本宗の推奨する教化活動を説明したリーフレット）」などで、その内容を説明し、実践を促す。—

しかし、こうした活動が日頃、兼職や兼務、通常法務で忙しく、なかなか実現できないことも理解できます。

そこで平成30年度では、教化目標（わたしたちの目標）の実現に向けたひとつの具体策として、年中行事において比較的に手間のかからないような形で、推奨する教化活動に取り組むことを提案してきました。

一その内容については、平成30年度中の『宗報』「教化活動推進のすすめ」や、総本山智積院ホームページの教師用ページ「年中行事と推奨する教化活動」に掲載しています。今一度ご

確認いただき、各寺院での教化活動にご利用くださいと幸甚です。—

このように考えれば、日常の仏事から教化活動に至るまで、説明と体験は車の両輪であるといえます。そして、説明と体験はそのまま、寺院活性化のキーワードともなるのです。

収集と提供

智山教化センターでは、智山伝法院開設講座にある二つの講座を企画担当しました。一つは、推奨する教化活動「阿字観」を末寺で開催していただくための「阿字観指導者を目指す人のための教理と実践」で、もう一つは、寺院を活性化するために現在必要と思われるさまざまな事象を学ぶ「寺院活性化論」です。特に平成30年度の「寺院活性化論」のテーマは、「檀信徒とのつながりを強化するために」でした。講座では、まず寺院をとりまく現状を知り、その後、実際に活動している各寺院の事例から学びました。事例の中で共通していたことは、ただ単に漫然と年中行事や教化活動に取り組んでいるのではなく、各寺院がおかれている環境や時流に合わせて取り組みを変化させてゆくこと、寺院から積極的に情報を発信してゆくこと、各寺院の教師や寺庭婦人が、ひとりひとりの檀信徒に丁寧に向き合っていることでした。そして、その中で特に寺院が早急に取り組むべきことがらとして注目を集めたのは、寺院の情報発信のツールである「寺報（寺便り：以下寺報）」の発行でした。本講座の各事例寺院では、何らかの形でお寺の状況や住職の想いを文字にしたためて、それを檀信徒に届けているのです。定期的に寺報を発行することは、時間と労力を有しますが、寺院活性化のツールとしては、優れないと改めて感じました。

一本宗では、未だ寺報の発行に触手を伸ばせない方のために、教師用ホームページに寺報テンプレートやイラスト集を用意いたしました。寺院活性化のためにご利用ください。—

社会現象、教化に関する積極的な情報の収集を基に、教化資材の発行や講座で末寺に提供する。

智山教化センターの事業の一つに、情報の収集と情報の提供があります。ですから寺院活性化論は、「愛宕薬師フォーラム」や「教化を考える会」などの各種講習会や研究会で所員が学んできたもの、また教区教化研究会や檀信徒教化推進会議などの各教区への出講時に得た情報、あるいは他宗との情報交換会によって得た情報を整理して、通年講座として開講しています。そして、各種の教化資材・資料も多方面の意見を取り入れて発行しています。

安らかなる心と「令和」

この緒言を執筆中に、新しい元号「令和」が発表されました。

初春の令月にして、氣淑く風和ぎ、梅は鏡前の粉を披き、蘭は珮後の香を薫す

改元発表の日、「令和」に込められた思いを聞いておりましたら、お大師さまの次の言葉を思い出しました。

それ禿なる樹、定んで禿なるにあらず。春に遭うときはすなわち栄え華さく

今、本宗の寺院が置かれている状況は、決して安穏としていられるものではありません。しかしながら、本宗寺院が、檀信徒を始めとするあらゆる人々の安心体得のため、地道に教化活動を展開してゆけば、それが必ずや人々に伝わり、機が熟し大輪の花を咲かせることができるのではないかでしょうか。その歩みは、遅くとも着実に前へ前へと進んでゆけるはずです。

そのような本宗寺院の教化活動に資する事業を、智山教化センターでは今後も展開してまいります。各寺院とともに歩むために。

平成30年度教化目標（わたしたちの目標）の推進

生きる力

—仏さまに祈り、仏さまと出会う

A. 研修・講習会の開催

1

教師・寺族向けの研修会

第20回智山総合研修会

本宗教師・寺庭婦人のさまざまな研鑽意欲に応えるために宗務庁が主催する分科会形式の研修会。智山教化センターでは2つの分科会の企画・運営を担当した。

日 時：平成30年5月29日（火）～5月30日（水）
 会 場：別院真福寺

第1分科会「がん～その不安と思いに寄り添うために」

平成28年の厚生労働省の報告によれば、日本人の2人に1人が生涯がんに罹患し、そのうちの3人に1人が亡くなるという報告がある。一方で、がんの治療法は選択肢も増えており、『がんとともに生きる』時代になったといえるが、これは不安とともに生きるということでもある。本分科会では、がん患者団体の代表、並びにがん患者の心のケアを提供する精神腫瘍科の専門医をお招きし、がん患者を取り巻く不安の実情、支援へのアプローチ方法を学ぶ機会とした。



—第1分科会—

講 師：西口洋平先生（一般社団法人キャンサーペアレンツ代表）
 清水 研先生（国立がん研究センター中央病院精神腫瘍科長）
 オブザーバ：佐藤隆一師（教化委員／神奈川教区圓能院住職）
 司 会：島 玄隆智山教化センター所員
 記 録：花木義賢智山教化センター所員
 参 加 者：50名

第3分科会「求められるお寺のあり方、寺院に関する満足度」

全日本佛教会と大和証券株式会社が平成29年に協働で行った「仏教に関する実態把握調査アンケート」の分析報告をたよりとして、家族の形態が変容し、価値観が多様化する現代において仏教、寺院、僧侶に今何が求められているかを確認し、私たち教師が実践すべきことについて考える機会とした。特に、アンケー



—第3分科会—

ト分析で「積極的に情報発信している寺院への満足度が高い」ことが挙げられていることから、寺院の情報発信について、「寺だより」などの「文書伝道の実際」と「インターネット発信」の実践事例をご講演いただいた。

講 師：佐藤泰之 氏（大和証券株式会社）
 奥島正就 師（教化委員／九州教区 東漸寺住職）
 小杉秀文 師（上総第四教区 勝覺寺住職）
 司 会：伊藤尚徳 智山教化センター所員
 記 録：鈴木芳謙 智山教化センター所員
 参 加 者：55名

報告：『宗報』815号（平成30年8月号）掲載

寺子屋開設講座

宗内教師・寺族（寺庭婦人を含む）を対象とし、未来の檀信徒を育成し地域にお寺を開く活動である「寺子屋」を宗内寺院・教会がより多く開催できるよう、ノウハウを総合的に学び実修などをとおして、身につけられる機会とした。

日 時：平成30年6月20日（水）
 会 場：別院真福寺
 内 容：講義①「寺子屋活動をはじめよう」
 実修「寺子屋体験」
 講義②「企画・広報・安全対策について」
 講 師：高岡邦祐 智山教化センター専門員
 佐藤順與 師（埼玉第二教区 一乗院中／菩提樹の森幼稚園 園長）
 佐藤英順 師（埼玉第十一教区 長榮寺住職）
 倉松隆嗣 智山教化センター所員
 参 加 者：11名



— 寺子屋開設講座 —

報告：『宗報』816号（平成30年9月号）掲載

教化活動実践セミナー

教化活動の具体的な場面を想定し、その状況にあわせた実践研修を行って、体験的に学ぶことを目的としている。教化活動は、その意義や方法を聞いただけでは理解できないため、体験学習を主体とした新しい研修形式として実修に主眼を置き、教化活動者の育成を目指している。平成30年度は、「土曜日半日開催」「巡礼」の二つのセミナーを開催した。

年中行事に合わせた教化活動を模索する（土曜日半日開催）

宗教意識の変化、少子高齢問題、人口減少など寺院を取り巻く環境が変化する中、寺院の持つ力を活かすには、寺院側から檀信徒への働きかけ、具体的には「教化活動」をいかに取り組んでいくかが重要になってくる。今回は、平成30年度の教化推進施策に即し、参加者のおかれている環境や立場が異なる中で、それぞれが年中行事に合わせてどのような取り組みを行えるかを考える機会とした。兼職等で平日の研修会に参加できない方にもご参加いただけるよう、土曜日半日の開催とした。

日 時：平成30年11月10日（土）
 テーマ：「年中行事に合わせた教化活動を模索する」
 内容：講義① 「本宗の現状と教化活動の重要性、
 さまざまな教化資材について」
 講師 倉松隆嗣 智山教化センター所員
 講義② 「年中行事の意味と意義、作法を知る」
 講師 高野智哉 智山教化センター専門員
 グループワーク 「年中行事に合わせた教化活動を模索する」
 参加者：7名



—教化活動実践セミナー—

報告：『宗報』821号（平成31年2月号）掲載

巡礼—西国観音巡礼で仏さまに祈り、仏さまと出会う

教師・寺庭婦人・檀信徒・密厳流遍照講講員を対象とし、平成30年に草創1300年を迎えた西国三十三所霊場での巡礼をおこなった。教師・寺庭婦人には実際の引率をとおして先達のノウハウや巡礼の作法などを実践的に体験していただき、さらには巡礼の企画・催行に必要な実務を学ぶ研修も設けた。とくに教師は道中で法話研修を行い、さまざまな場面で話す力をつけてもらうことを目指した。檀信徒・遍照講講員には、巡礼、写経、御詠歌を体験し、仲間とともに目標を達成することで、心の充足感を得ていただくようつとめた。また、総本山智積院参拝と西国霊場巡礼を組み合わせた、団参のモデルケースの提案を目的の一つとした。

日 時：平成30年12月3日（月）～5日（水）
 テーマ：「西国観音巡礼で仏さまに祈り、仏さまと出会う
 ～西国三十三所草創1300年に御詠歌の源流を訪ねる～」
 巡礼寺院：総本山智積院、西国三十三所霊場のうち8ヶ寺
 （六波羅蜜寺、今熊野観音寺、穴太寺、善峯寺、革堂行願寺、六角堂頂法寺、三井寺、
 石山寺）
 内容：霊場巡礼

研修①「御詠歌実修」
 「先達ガイダンス（巡礼の所作、マナー、
 心構え及び引率者の役割）」
 研修②「御詠歌実修」・「法話実修」
 研修③「十善戒写経」
 研修④「御詠歌実修」・「巡礼へのいざない」
 研修⑤「智積院金堂での御詠歌奉詠」
 講師：山川弘巳 智山教化センター長（大先達）
 佐脇貞憲 智山教化センター専門員（十善戒写経・巡礼へのいざない）
 佐藤芳典 智山教化センター専門員（御詠歌実修）
 相川孝純 密厳流遍照講指導師範詠秀（御詠歌実修）
 島 玄隆 智山教化センター所員（先達ガイダンス・巡礼へのいざない）
 参加者：50名



—教化活動実践セミナー—

報告：『宗報』822号（平成31年3月号）掲載

教師・寺族と檀信徒がともに参加できる研修会

愛宕薬師フォーラム

教師・寺族・檀信徒・一般の方々の知的好奇心に応えるため、仏教、さらには現代社会が抱える問題や社会現象などのさまざまなテーマで講演会を年4回開催した。

本年度も、別院真福寺を会場に各界の専門家による講演が行われた。参加者のより深い理解を促すべく、講演後には質疑応答の時間を設けた。

■第32回 平成30年6月22日(金)

テ　一　マ：「魅惑の仏像(ほとけ)たち」
 講　　師：籐内佐斗司先生(東京藝術大学院教授)
 司　　会：花木義賢 智山教化センター所員
 参　加　者：81名

報告：『宗報』816号(平成30年9月号)掲載



— 藤内佐斗司先生 —

■第33回 平成30年9月28日(金)

テ　一　マ：「手を合わせると
 一人はなぜ祈り、祈りは何をもたらすのかー」
 講　　師：棚次正和先生(京都府立医科大学名誉教授)
 司　　会：中嶋亮順 智山教化センター所員
 参　加　者：64名

報告：『宗報』819号(平成30年12月号)掲載



— 棚次正和先生 —

■第34回 平成30年11月20日(火)

テ　一　マ：「仏具を生み出す伝統と技法
 ～未来の国宝をつくる男たち～」
 講　　師：京仏具製作 京都秀工会
 雁瀬俊彦(木地担当)
 下岡一人(漆工担当)
 加藤雅大(箔押担当)
 吉川 実(鎔金具担当)
 司　　会：島 玄隆 智山教化センター所員
 参　加　者：37名

報告：『宗報』821号(平成31年2月号)掲載



— 京都秀工会 —

■第35回 平成31年2月13日(水)

テ　一　マ：「日本の妖怪と神仏
 ～妖怪文化にみる日本人の宗教意識～」
 講　　師：今井秀和先生(大東文化大学非常勤講師)
 司　　会：伊藤尚徳 智山教化センター所員
 参　加　者：45名

報告：『宗報』824号(令和元年5月号)掲載



— 今井秀和先生 —

第21回檀信徒研修会(教化部企画運営協力)

全国の檀信徒が、信仰を深め、日々安らぎに満ちた生活を送っていただくことを目的として総本山智積院に集い、お釈迦さまやお大師さま、興教大師さまの教えを学ぶとともに、さまざまな宗教体験(御詠歌、阿字観、檀信徒法要など)を実修するために開催した。今回は、3年カリキュラムのうちの3年次のカリキュラムを実施した。

日 時：平成30年10月4日(木)～5日(金)

会 場：総本山智積院

テ－マ：「興教大師さまについて学ぶ

～興教大師さまの生涯と教えを学び、
曼荼羅に描かれている真言宗の仏さまを知る～」

参 加 者：116名

内容・講師：法 話「興教大師さまのご生涯と教え」

小林崇仁 師(教化委員／長野南部教区 平福寺住職)

実 修「阿字観」

磯山正邦 智山教化センター所員

実 修「御詠歌」

漆山照隆 密厳流遍照講指導師範詠匠

花木宋暢 密厳流遍照講指導師範詠秀

分散会「家庭の中の仏事について」

法 話「総本山の大日如来さま～さまざまな仏たち」

伊藤堯貴 智山伝法院客員講師

法 要「檀信徒法要」



— 第21回檀信徒研修会 —

報告:『宗報』819号(平成30年12月号)掲載

教区教化研究会・檀信徒教化推進会議 運営セミナー

今回の運営セミナーは各教区の新教区長を対象に、「教区教化研究会」・「檀信徒教化推進会議」の開催意義や開催・運営手法を学ぶためのセミナーとして開催した。特に今年度は、平成31(令和元)年度の教化推進施策への理解を深め、変容し続ける葬送儀礼の現状を知り、寺院・僧侶には今何が求められ、どう対処すべきかを考える機会とした。

また、各地域での葬送儀礼における課題とそれに対する対応策を話し合い、そこから「教区教化研究会」・「檀信徒教化推進会議」のプログラムのヒントを探った。

日 時：平成31年3月15日（金）
 会 場：別院真福寺
 テーマ：「教区でできる研修会を考える
 —葬送儀礼の現状をみつめて—」
 参加者：59教区59名、教化委員3名
 内容・講師：ガイダンス
 「教区教化研究会と
 檎信徒教化推進会議の開催方法」
 小峰誠昌 教化部教宣課長
 「教化資材の紹介と活用法」
 中嶋亮順 智山教化センター所員
 「平成31年度本宗の教化推進について」
 山川弘巳 智山教化センター長
 基調講演
 「葬送儀礼の現状をみつめる、寺院・僧侶に求められるものとは」
 藤丸智雄 師（浄土真宗本願寺派総合研究所 副所長）
 質疑・応答
 分散会
 「葬送儀礼の現状—今、寺院・僧侶がすべきこととは」



—藤丸智雄師—



—分散会—

報告：『宗報』824号（令和元年5月号）掲載

5

その他（企画・運営協力）

第58回中央布教師会総会

中央布教師会は、各教区の布教師会会长が集い、年1回総会を開催している。その企画・運営に協力した。

日 時：平成30年4月10日（火）
 会 場：別院真福寺
 内容・講師：解説「平成30年度からの教化目標について」
 山川弘巳 智山教化センター長
 法話実演「十善戒和讃」
 吉岡光雲 密厳流遍照講指導師範
 布教実演「感動と畏敬の念が深まる葬送儀礼と布教活動」
 工藤智教 師（奥羽教区布教師会会长）
 上野法忍 師（栃木中央教区布教師会会长）
 中嶋 栄 師（埼玉第十二教区布教師会会长）
 荒木快英 師（新潟第二教区布教師会会长）
 岸田正博 師（東京東部教区布教師会会长）

報告：『宗報』814号（平成30年7月号）掲載

第26回寺庭婦人連合会総会

寺庭婦人連合会は、各教区の寺庭婦人会会長が集い、年1回総会を開催している。その企画・運営に協力した。

日 時：平成30年5月10日（木）～11日（金）

会 場：真言宗智山派宗務庁

テー マ：「教区寺庭婦人会の活性化に向けて」

内容・講師：「平成30年度以降の教化推進施策について」

笹沼弘憲 教化部長

分散会「各教区の活動報告と情報交換」

実習「匂い袋つくり」

分散会「連合会役員の任期と教区会長の任期について」

参 加 者：46名

報告：『宗報』815号（平成30年8月号）掲載

智山伝法院開設講座

智山伝法院は本宗の研究機関として、教育の一端を担うべく開設講座を開催し、教師・寺庭婦人の学習の場を設けている。智山教化センターでは本年度2講座を智山伝法院と共同企画した。

■阿字観指導者を目指す人のための教理と実践

阿字観について教相・事相・教化などさまざまな視点から毎回違った先生に阿字観についてのご講義をいただき、その後、阿字観の実修を行い、阿字観の指導者としての知識や経験を積み、阿字観道場の開設を目指す場とした。

報告：『宗報』816号（平成30年9月号）掲載



— 阿字観指導者を目指す人のための教理と実践 —

■寺院活性化論－檀信徒とのつながりを強化するために－

講師によるさまざまな事例紹介のほか、グループワークや寺報づくりの実修、実地見学なども行いながら、檀信徒とのつながりを強くするためには何が必要かを学び、各寺院を取り巻く環境が異なるなかで自坊の強みとは何か、自分のおかれている立場でどういった活動ができるかを受講者一人一人が考える機会とした。

報告：『宗報』815号（平成30年8月号）掲載



— 寺院活性化論－檀信徒とのつながりを強化するために－

B. 教区等の活動について

平成30年度 教区教化研究会 開催一覧

教区	日時	参加人数	講師	テーマ
長野北部	5月9日	38名	井出悦郎 氏 一般社団法人お寺の未来代表理事	ポスト檀家時代のお寺の会員制度と永代供養墓
茨城第一	5月9日	26名	磯山正邦 センター所員	必要とされる寺院となるためには 一世間・檀信徒が寺院・僧侶に求めるものー
栃木中央	5月9日	40名	佐藤隆一 教化委員	グリーフケアとしての葬儀について
埼玉第二	5月9日	35名	山川弘巳 センター長	葬儀をめぐる諸問題
岩手	5月13日	35名	渡辺道夫 師	現代社会における寺院活動
新潟第三	6月6日	30名	田中悠文 講伝所常在所員	大般若会について
埼玉 第七・八・九	6月11日	24名	山川弘巳 センター長	僧侶から見た全日本仏教会・大和証券の調査結果
安房第一	6月23日	25名	①久保田剛士 財務部長 ②別所弘淳 伝法院常勤研究員	①宗教一般 智山派の現状について ②教化 教化推進の手引き・教化目標について
上総第四	6月29日	23名	片野真省 師	檀信徒のより所となる菩提寺とは? 本尊信仰を育むため出来ること
北海道	7月20日	15名	長谷川実彰 師	生きる力ー仏さまに祈り、仏さまと出会う
宮城・東海	9月4日		長谷川実彰 師 佐藤雅晴 センター専門員	伝えることと備えることの大切さ 事例発表と研究討議ー
埼玉第一	9月13日	15名	鈴木芳謙 センター所員	寺院の外部環境の変容 人口減少、少子化、お墓、家族ー
新潟第二	9月27日	22名	磯山正邦 センター所員	必要とされる寺院となるために一人が集まる寺院を考える。ー
東京南部	10月12日	17名	櫻井芳信 講伝所非常勤所員	二箇法要を教化に活かすには
北陸	10月13日	10名	海老塚和秀 師	遍路・団参
東京北部	10月16日	15名	山川弘巳 センター長	寺院教化活動に於ける諸問題
埼玉第四	10月31日	27名	山川弘巳 センター長	通夜・葬儀における教化の向上について
福島第三	10月31日	10名	伊藤尚徳 センター所員	智山勤行法則について 次第の成り立ちと意義を中心に
奥羽	11月1日	13名	①久保田剛士 財務部長 ②花木義明 師	①宗祖弘法大師ご誕生1250年記念奉修事業 ②感動と畏敬の念が深まる葬送儀礼と布教活動
新潟第一	11月12日	19名	宮坂宥満 伝法院長	観音菩薩の信仰と功德を考える
安房第四	11月12日	16名	金本拓士 伝法院非常勤教授	「仏教に関する実態把握調査報告書」から見えるもの
埼玉第十	11月12日	12名	山川弘巳 センター長	智山派が推奨する教化活動と自坊の課題
安房第三	11月18日	20名	伊藤尚徳 センター所員	戒名について
神奈川	11月21日	25名	堀江宗正 氏 東京大学大学院人文社会系准教授	死と看取りの宗教心理 ー自己の死と他者の死のつながりー
安房第二	11月24日	17名	上村正健 センター所員	戒名について ー戒名の由来と遺族に喜ばれる戒名の付け方ー
下総印旛	11月24日	33名	石川照貴 講伝所所員	暦の研究
栃木北部	12月10日	19名	山川弘巳 センター長	真言宗智山派の教化推進について ー教化目標に基づいてー
東京西部	2月5日	20名	鈴木芳謙 センター所員	寺院を取り巻く諸問題に対応するために ~教区内寺院の活性化のために、教区における研修会の意義と必要性を考える~
東京東部	2月13日	16名	藤田庄市 氏	拡大するスピリチュアル・アビュース（靈的虐待） ーカルト宗教の事実からー
長野南部	2月13日	21名	杉本栄次 総務第1課長	人口減少社会・過疎問題について
高知	3月7日	21名	花木義明 師	工夫ある葬送儀礼と地域に根差した教化活動の実践
愛媛	3月19日	33名	岡澤慶澄 師	共に考え語り合う、求められる住職とお寺の姿

計32回 のべ35教区開催 ※「講師」の肩書きは開催当時のもの

平成30年度 檀信徒教化推進会議 開催一覧

教区	日時	参加人数	講師	テーマ
佐渡	5月27日	60名	吉岡光雲 師	十善戒の話、十善戒和讃
東京多摩	5月28日	200名	菊池幸夫 氏 弁護士	出会いの人生から学んだこと
埼玉 第十・十一・十二	5月31日	347名	田中ひろみ 氏 イラストレーター	生きる力 仏さまに祈り、仏さまと出会う
東京北部	6月6日	83名	橋浦寛能 伝法院嘱託研究員	～智積院の能化さま～
福島第二	6月17日	101名	糸井龍祐 師	合掌
上総第一	6月17日	75名	圓川ひろみ 氏 岡田夏希 氏 富津市役所健康福祉部健康づくり課保健師	寺院の活性化を目指す～健康・長寿生活への働きかけ～
安房第二	6月23日	73名	久保田剛士 財務部長	宗祖弘法大師ご誕生1250年記念奉修事業について
安房第三	6月23日	156名	渡辺宥真 師 岡本茉利 氏 女優・声優	布施行 一無為施
高知	6月23日	700名	露の団姫 氏 落語家	いのちのあり方を見つめるつどい 「第6回いのち～仏さまに祈り 仏さまと出会う」
安房第一	6月24日	171名	①久保田剛士 財務部長 ②別所弘淳 伝法院常勤研究員	①宗祖弘法大師ご誕生1250年記念事業奉修について ②弘法大師の生涯と真言宗の教え
栃木中央	6月29日	128名	高牧 康 氏 ボイストレーナー	「読経とご詠歌、もう一つの効果」について
栃木北部	7月4日	152名	田村宗英 伝法院常勤講師	智山勤行式をお唱えしましょう 腕輪念珠を作ってみましょう
新潟第三	7月5日	66名	櫻井芳信 講伝所非常勤所員	11月開催予定の結縁灌頂の解説
新潟第一	7月5日	86名	倉松隆嗣 センター所員	生きる力 仏さまに祈り、仏さまと出会う～
福島第一	7月11日	170名	遍照講師範・青年会各師	御詠歌オペラによる弘法大師のご生涯
新潟第二	7月11日	113名	伊藤尚徳 センター所員	生きる力 仏さまに祈り、仏さまと出会う 「智山勤行式」一般若心経について
埼玉 第七・八・九	10月4日	569名	長谷川興賢 師	仏さまに祈り 仏さまと出会う
栃木南部	10月4日	195名	腰塚勝也 教化委員	安寧への祈り
山形村山	10月8・9日	60名	なし	東日本大震災被災地訪問研修
岩手	10月14日	106名	宮澤明裕 氏 宮澤賢治記念館学芸員	信仰の推進
安房第一	10月14日	110名	田村宗英 伝法院常勤講師 伊藤尚徳 センター所員	寺庭・婦人研修会
上総第三	10月14日	590名	小林文仁 師 加藤快雄 師	仏さまに祈る 一震災物故者追悼法要 復興応援民謡演芸会
京阪	10月31日	70名	信貴山真言宗大本山成福院貫主 鈴木貴晶 師	気は異なるもの味なもの
長野北部	11月1日	71名	教区内教師・ 長野北部教区布教師会	仏教に学ぶ・体験する 一安らかなる心を得一
福島第三	11月1日	80名	伊藤尚徳 センター所員	智山勤行式の解説
宮城	11月6日	107名	笹沼弘憲 教化部長	弘法大師について
埼玉第一	11月12日	149名	鈴木英全 師 山越忍隆 師	国宝を訪ねる 特別参拝の旅 僧侶によるご案内と御法話
埼玉 第四・五・六	11月15日	625名	笹沼弘憲 教化部長 北野 大 氏	生きる力 仏さまに祈り 仏さまと出会う
山梨	11月17日		高岡邦祐 センター専門員	お大師さま
新潟第三	11月21日	170名	大森真弘 講伝所常駐阿闍梨 櫻井芳信 講伝所非常勤所員	「仏様と出会う」結縁灌頂
長野南部	12月6日	80名	白馬秀孝 師 高野山真言宗郷福寺副住職	宗祖に近づく

計31回 のべ37教区開催 ※「講師」の肩書きは開催当時のもの

C. 各種講習会等の出講について

平成30年度 青年会講習会 智山教化センター長、所員・専門員 出講一覧

教区	日時	講師	テーマ
東京多摩	12月9日	吉田住心 センター専門員	インターネットを活用した寺院活性化の方法

平成30年度 教区講習会 智山教化センター長、所員・専門員 出講一覧

教区	日時	講師	テーマ
栃木南部	6月6日	原 豊壽 センター専門員	葬儀・法事における法話のポイントと実例
埼玉第五	6月30日	高岡邦祐 センター専門員	檀信徒教化Ⅱ
東海・美江	7月25日	上村正健 センター所員	暦の見方
山形村山・山形庄内・山形置賜	7月29日	倉松隆嗣 センター所員	お大師様のご生涯
山梨	10月13日	磯山正邦 センター所員	葬送の儀に関する諸問題
下総香取・茨城第二	11月30日	山川弘巳 センター長	教化からみた葬儀
埼玉第一・二・三	2月5日	山川弘巳 センター長	現代における葬儀の実状と供養の変化から考えられる教化とは
栃木中央	3月9日	山川弘巳 センター長	これからの自坊における教化

その他研修会等 智山教化センター長、所員・専門員 出講一覧

出講内容	日時	講師	テーマ
智山伝法院出張講座（長野北部教区寺庭婦人会）	4月18日	鈴木芳謙 センター所員	本宗の教化推進の現状を学ぶ
埼玉第九教区総会	5月8日	中嶋亮順 センター所員	年中行事と推奨する教化活動について
大正大学講義	6月19日	鈴木芳謙 センター所員	仏教学基礎ゼミナールⅣ
教師講習所基礎科	6月26日	上村正健 センター所員	実践布教Ⅴ・Ⅵ
真言宗豊山派千葉県布教師会	6月28日	山川弘巳 センター長	仏教（菩提寺）に対する檀信徒の意識
教学研修所1期・2期	8月9日～11日	花木義賢 センター所員	教化Ⅰ・Ⅱ、教化復習
新潟第一教区寺庭婦人講習会	10月12日	塙地義法 センター所員	阿字觀の解説と実修
教師講習所応用科	10月15日	鈴木芳謙 センター所員	社会問題研究Ⅱ
智山伝法院出張講座（宮城教区）	1月22日	鈴木芳謙 センター所員	これからの寺院経営のための要点を考える
住職主管者講習会	2月17日	山川弘巳 センター長	檀信徒との向き合い方 後継者育成について
遍照講指導師範会議	3月1日	山川弘巳 センター長	平成31年度本宗の教化方針について
智山尼僧の会勉強会	3月5日	伊藤尚徳 センター所員	三陀羅尼について
智山伝法院特別講習会	3月14日	山川弘巳 センター長	引導について考える～教相・事相・教化の視点から～

教区教化研究会は、32回（のべ35教区／合同開催を含む）で開催された。その開催された研究会のテーマ別に開催数の多い順に見てみると、「これからのお寺・僧侶のあり方」に関するもの（11回）、「葬儀」に関するもの（10回）、「教化目標」「推奨する教化活動」に関するもの（7回）となった。

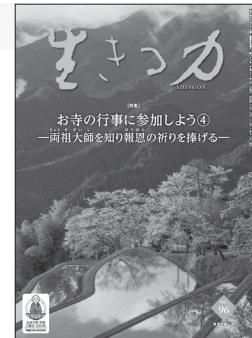
檀信徒教化推進会議は、31回（のべ37教区／合同開催を含む）で開催され、「宗内外僧侶による法話・講演」をテーマとした開催数が、8回と最大であった。続いて「著名人の講演」「落語」等に関する研修会（7回）、「教化目標」「推奨する教化活動」に関する研修会（5回）となった。他にも「団参」「被災地訪問」「御詠歌オペラ」「法楽紙芝居」「結縁灌頂について」などをテーマに、檀信徒とともに時間も空間も、そして心をも共有するような研修がなされている。

また智山教化センター長を始め、所員・専門員が、出講した教区講習会などの研修会でも積極的にさまざまなテーマを取り上げ、活発な研鑽・交流が行われていることがうかがえる。特に注目すべきは、青年会や寺庭婦人会にも、その傾向は広がりをみせ、各会で鋭意取り組んでいることである。

D. 出版物と教化資料・教材

①生きる力SHINGON 檀信徒の「生きる力」を育む仏教総合教化誌

- 第93号** 平成30年6月1日発行 頒布数106,825部
特集 お寺の行事に参加しよう ご先祖様を供養する年中行事
—お施餓鬼・お盆・お彼岸—
- 第94号** 平成30年9月1日発行 頒布数51,051部
特集 お寺の行事に参加しよう② お釈迦さまの三大行事
—花まつり、成道会、常楽会—
- 第95号** 平成30年12月1日発行 頒布数88,742部
特集 お寺の行事に参加しよう③ 祈願の行事と年末年始
—護摩供、大般若会、除夜の鐘、星まつり—
- 第96号** 平成31年3月1日発行 頒布数56,553部
特集 お寺の行事に参加しよう④ 一両祖大師を知り報恩の祈りを捧げる—



②智山ジャーナル 智山派教師の自己研鑽と資質向上を目指す専門誌

- 第85号** 平成30年6月1日発行
特集 寺院建築を知る
- 第86号** 平成30年8月1日発行
特集 「理趣経」を受持する
- 第87号** 平成30年11月1日発行
特集 仏教と文学
- 第88号** 平成31年2月1日発行
特集 あの世を語る



③ポスターカレンダー

- 平成30年9月1日発行
「総本山智積院の四大明王像」
檀信徒頒布用B2判カレンダー
1部100円
頒布数22,856部



④教化目標（わたしたちの目標）啓発ポスター

- 教化目標「生きる力—仏さまに祈り、
仏さまと出会う」の啓発と
寺院行事への参加を
呼び掛けるポスター



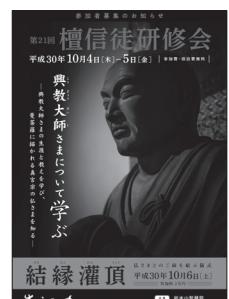
⑤柱掛けカレンダー「今月の法語」

- 平成30年9月1日発行
檀信徒頒布用カレンダー
「日ごろの暮らしに現れる伝統文様と法語」
1部100円
頒布数112,473部



⑥檀信徒研修会チラシ

- 総本山智積院開催の
「檀信徒研修会」「結縁灌頂」
参加推奨のチラシ



⑦寺子屋かわらばん Vol.9

平成31年3月21日発行
寺子屋活動に関する
本宗寺院・教会の交流誌



⑧年報22号

平成30年6月1日発行
智山教化センターの
1年を報告



⑨仏事がわかるリーフレット

09 両祖大師とご宝号
1部30円
平成30年6月1日発行
頒布数32,125部



10 感謝の心と葬儀
1部30円
平成30年11月1日発行
頒布数28,784部

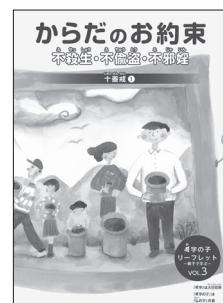
⑩ちさんうでわ念珠作成キット「釈迦如来」

平成30年6月1日発売
寺子屋プログラムで人気の「うでわ念珠づくり」を
さまざまな機会に体験してもらえるよう
一人分のパッケージにした自作キット
1個300円
頒布数578



⑪あさ字の子リーフレット vol.3 からだのお約束 不殺生・不盜賊・不邪淫 十善戒①

平成31年3月31日発行
青少年年に向けた
仏教情操リーフレット



企画・編集

⑫宗祖弘法大師空海ご誕生1250年 告知ポスター・リーフレット



智山派教師用ホームページからのダウンロード版

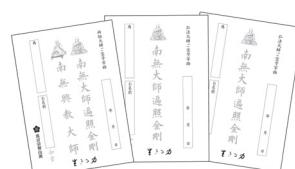
⑬年中行事と推奨する教化活動

教化推進策に基づき、
本宗寺院・教会で行われ
ている“年中行事”の
中に“推奨する教化活動”
を取り組んでもらえるよ
う作成した資料



⑭ご宝号写経

檀信徒向け写経の導入版として作
成した両祖大師ご宝号の写経手本



⑮寺報テンプレート

文章を入れ込め
ば簡単に寺報を作
ることができる書
式と文章のテンプ
レート
年中行事ごとのイ
ラスト素材も同時
アップロード



※頒布数は平成31年3月31日現在

1 真言宗智山派における教化活動の黎明II

—つくしあい運動の展開 50年後の視点から—

智山教化センター 所員 伊藤尚徳

1. はじめに

現代の既成仏教教団の多くは、その社会的活動の中心にいわゆる「教化活動」をおく。各宗団には教化スローガン、教化テーマ、教化目標なるものが存在し、教師たちはそれらの教化主題を念頭におきながら、末寺において寺院の特色を生かしつつ、さまざまな工夫をしながら教化活動に勤しんでいる。

一方で、いまや「教化」という活動は、仏教教団たれば自明の活動のごとく認識されており、それが定着し継続されているためか、かえって現代の教化の担い手である教師においては、各宗団が教化活動を行うようになった経緯について、ことさら意識されていないようにも窺われる。無論、社会環境の変化や、人々の多様な価値観に即応できるよう、隨時、宗団として行うべき活動を模索し、それを教化活動として展開していく上では、その濫觴まで顧みる必要はないかもしれない。しかし、今日まで行われてきた教化活動の変遷を省察しなければ、教化の効果を検証することはできないし、教化の本来的な意義を見失ったまま将来に展開する可能性もあるだろう。

本宗では現在、教化目標「生きる力—仏さまに祈り、仏さまと出会う」のもとに、智山勤行式や御詠歌の唱和、写経、写仏、その他13種類の実践を〈推奨する教化活動〉

としているが、本宗において教化活動が意識されて以来、今日のような教化活動が構築されるまでに、「教化」というものがどのように意識され、活動として形作られていつたのか、その変遷について確認しておきたい。

そのため昨年の教化推進レポートにおいては、本宗の機関誌である『真言宗智山派宗報』（以下、『宗報』）に依りながら、戦後に智山派が復興した昭和26年から、本宗の教化運動「つくしあい運動」が開始した昭和45年までの20年間を教化活動の黎明期と位置づけ、その間の本宗の動向を概観した。これに引き続き、本稿では、昭和45年から開始された本宗の教化運動「つくしあい運動」に焦点をあて、それがどのように誕生し、展開したかについて見ていくことにする。なお、以下には先師の言を多く引用するが、発言者の敬称については当時の職位、または師の尊称をもって統一している。

2. つくしあい運動にいたるまで

昭和30年代に急激に教線を拡大した新興宗教への危機感から、本宗においても「現代に即した教化」の必要性が叫ばれ、そのための研究機関として昭和43年に「智山教化研究所」（以下、教化研究所）が設立された。

教化研究所の初代所長の任にあたった長澤實導師は所信表明で以下のように述べている。

「教化」ということは、人々の信仰心をみちびき出して方向を与え、それを精神生活の根本として植えつけることあります。

本研究所は、本宗各位がそういう教化活動をなさるための中心的機関であります。こういう意味で、「教化」は、教学をふまえた上での応用であってアカデミックな教学そのものと区別されるべきであります。

そこで第一に、教化というものに支柱を与えるべき原理を設定したいものです。口説布教や文書伝道に応用せられる基礎となるもの、それを求めたいのであります。明治百年、われわれの先賢たちは、近代日本の初期に、《耶蘇教》の伝道に対抗して、布教の先鞭をつけてくれました。しかし今日の仏教伝道は、その当時にくらべて本質的にどれほど進歩しておりますか。教化ということが根を下ろすために、またその場かぎりのものでなく将来の路線を確定するために、一つの支柱を求めようと思います。

一つの試みとして、近代伝道学の方法、原語から味読する聖典研究、教化活動の宗教社会学的な考察・調査と反省などの研究テーマをとおして、将来のための支柱を立てたいであります。

（長澤實導「智山教化研究所長就任のご挨拶」『宗報』昭和43年6月号）

ここで長澤所長は「教化」というものを「人々の信仰心をみちびき出して方向を与え、それを精神生活の根本として植えつける」ことと明確に定義されている。しかも

それは「教学をふまえた上での応用」であり、「アカデミックな教学そのものと区別されるべき」であるという。そしてまた、近代以来の「布教」という教化の方法から、より現代的に進歩したものを目指していたように窺われる。〔注1〕

また、長澤所長は「口説布教や文書伝道に応用せられる基礎となるもの、それを求めたい」と述べていることから、教化研究所が目指したもののは、教化そのものの研究ではなく、その基礎にあたるものを模索していくことであった。そのことは「近代伝道学の方法、原語から味読する聖典研究、教化活動の宗教社会学的な考察・調査と反省などの研究テーマをとおして、将来のための支柱を立てたい」と述べられていることからも理解できる。このなかでも聖典研究などは、およそ教学の範疇に含まれるものであろう。

戦後から教化研究所の設立に至るまでの本宗の議論において、社会の人々にむけた教化の不備が指摘され、その必要性が声高に叫ばれた一方で、伝統教学が等閑にされる傾向にあったことを考慮すると、教学を教化の基礎の一つに定めた長澤所長の言葉は、教化から乖離しようとする伝統教学を、再び引き戻そうという意図があったようにも見受けられる。また、宗教社会学的な考察・調査と反省は、教化の対象を檀信徒という枠に限定しない社会全体を想定したものであるといえ、教化を十全に發揮する上で、変化する社会の状況を着実にとらえることを重要視していたと考えられる。

しかし、当時の宗団が教化研究所に求めていたものは「現代に即した教化」というものを一刻も早く一つの形として提示することであった。折しも当時の那須政隆管長は、寺院住職と檀信徒をまとめて僧伽としてとらえ、僧伽を基本とした僧俗一体による教化運動を展開してはどうかという御提

撕を示されていた。これを受けた当時の田中隆惠内局は教化研究所に教化運動の研究を打診し、研究所では昭和44年から教化運動の研究に取り組み、一年が経過した昭和45年8月には「つくしあい運動の理解と展開」と題する研究報告書が提出された。この報告書に基づき、宗団としての教化運動「つくしあい運動」は形作られたのである。当時、他宗団においては昭和37年に浄土真宗大谷派で発足した同朋会に始まった「同朋会運動」に続くように、「門信徒会運動」(真宗本願寺派 昭和37年)、「おてつぎ運動」(浄土宗 昭和41年)、「一隅を照らす運動」(天台宗 昭和44年)など、宗団としての教化運動と呼ばれるものが続々と標榜されていた。高野山真言宗の合掌運動、真言宗豊山派の光明曼荼羅運動なども智山派の教化運動の展開に影響を与えたといえる。^[注2]

3. つくしあい運動のはじまり

昭和44年から教化研究所で開始された「つくしあい運動」の研究は、年内に取りまとめられ、結果的に、その目的は「密教精神に基づき、僧俗一体による信仰運動を開拓し、眞に明るい家庭・平和な社会を建設する」というものになり、運動の理念4項目と7つの具体的な展開として提示された。^[注3]

つくしあい運動の名称と理念は、金剛界曼荼羅にみえる相互供養のありようを象徴的に表現したものであった。しかし、当初から密教の教義を、現代の教化の場面に反映することの難しさを指摘する声は少なくなかった。

当時の宗報には、つくしあい運動開始にあわせて檀信徒向けに発行した教化リーフレット「生きる力—大日如来」の表現についての質疑応答が記されている。

「この如来は果てしもない宇宙をそのおからだとし、はじめもない大昔から終わりもない未来の彼方に向って、理法のままに無限の活動を続ける如来であります」と申しますと、仏教の一貫した原理である「有仏無仞性相常住」をどう説明いたらよいか御教示を願いたいのでございます。(「リーフレットにおける一二の問題」(『宗報』昭和45年4月号)

「理法のままに無限のいのちの活動を続ける」という文がありますが、ここで使われている理法とはどういう意味なのでしょうか。(中略)

「つくしあう」ということですが、「自分のつとめに全力をつくして生きる」ことがはじめで述べられていますが、「自分のつとめ」とはどういうことなのでしょうか。自分の仕事ということでしょうか。もっと大きな意味だと思いますが、具体的にどう説明したらよいでしょうか。(「リーフレットとつくしあい運動—質疑応答—」(『宗報』昭和45年5月号)

我即大日と説ける教理からして宇宙をおからだとする仏との表現は、あまりに飛躍しすぎて仏教学的に見て、一考を要すると思われますが、如何ですか。(「再びリーフレットについて—」(『宗報』昭和45年6月号)

このように、密教の教理を現代的な感覚をとおして表現することへのとまどいが教師たちに見受けられ、また「つくしあい」の意味を檀信徒にどう説いたらよいかということも問題となっていることがわかる。

教化研究所では、それらの質問への回答を示しつつも「概して現代感覚の中に密教の真理を表現していくことは、表現の平易

化と同様に、幾多の誤解が生ずる場合が少なくありません」と付言している。伝統教学を現代的教化として反映する際に生じる摩擦を抱えながら、つくしあい運動は動きはじめたのである。

4. 教化資料「つくしあい手帳」の発行と活用

昭和46年3月には『つくしあい手帳—つくしあい運動の理解と展開』(真言宗智山派宗務庁発行)が発刊された。これは教師用の教化資料として発刊されたものであり、冒頭にはつくしあい運動の仏教的意義について以下のように記されている。

この「つくしあい」の語のもつ仏教的意味は、又、根本と究竟との二面にわたっている。

一、大乗根本の義

①空の生活実践

仏法に帰依し、苦の滅への道程を、無我の実践として、どこまでもどこまでも仏に向って、共に真実の生き方を真剣に探求していく、という義である。

②僧伽の生活実践

僧俗が一体となって、三宝に帰依し、共に仏の道を歩んで、おたがいの仕合せと平和な暮らしの実現にひたすら努力精進していく、という義である。

二、秘密究竟の義

①三密相応の生活実践

生命の真実は大日如来の境界であり、法身如来の体用相たる六丈、四曼、三密がそれぞれ本来圓融無碍に相即渉入し「つくしあっている」のが真相である。この大いな

るいのち(法身大日如来)のはたらきと在り方を信仰生活の基本的実践方式として、おたがいの個性を尊重し、生命の一切を法身如来に託しきって、限りある所縁の生をありったけの力をつくして、おたがいの仕合せとこの世の平和のため、一所懸命に精進努力していく、という義である。

②相互供養の生活実践

自心の源底である大日智法身(金剛界マンダラ)のうち成身会(根本会、羯磨会)に象徴的に表現される相互供養の実践として、無住所涅槃の生かしあう信仰生活を意味する。即ち本来自他は、法性として、生命として一如平等であるから、他の一切を善友として供に築きあう生活。つまり、自分を空しして他を慈しみ、喜びをわかつ施し施され、常に正法の興隆をめざしておたがいに自己の特質を出しきって惜しみなく供養しあう、という義である。

また、つくしあい手帳には、つくしあい運動の基本的姿勢も記される。

1 大日如来の信仰運動

大日如来に帰依し、諸尊信仰を徹底純化して、法身に生きる。

2 三密行の徹底

無明による苦の三業を調御して、三密行に高め如来の活動を体現していく。

3 積極的生活姿勢

生の真実にめざめ、限りない創造と向上にたゆまず精進する。

4 和合衆意識の高揚

縁起の思想を体し、寺檀・家庭・社会において、僧俗一体となって、信仰によるつくしあいの生活を築いていく。

5 生活意識の革命

自己の使命にめざめ、生の特質を深め、個のいのちをつくす。

このように手帳の内容は、多分に宗教的かつ抽象的であったために、つくしあい運動を徹底するためには、宗内教師への十分な説明が不可欠であった。手帳の発刊にともない、つくしあい運動の理解を深めるという目的で、全国19カ所で教師を対象とした教化推進会議が開催されている。教化推進会議のなかでは「つくしあい運動」や「つくしあい手帳の内容」についてさまざまな指摘がなされたようである。(『宗報』昭和46年9月号)

この教化推進会議に派遣された教化研究所の真保龍斎師は、会議のなかで説明した内容について「つくしあいの教化理念と実践活動」(『宗報』昭和46年10月号)のなかで紹介している。その項目は以下のようなものである。

一. つくしあいの教化理念

1. つくしあい運動の原点と大目標
2. つくしあい運動の意義
 - ①歴史的意義
 - ②社会的・現代的意義
 - ③宗団的意義
3. つくしあいの教理的根拠
4. つくしあいの基本的理念

二. つくしあいの実践活動

1. つくしあい運動の拠点とその役割
2. 仏壇の莊嚴指導とイメージチェンジ
3. つくしあい手帳の活用
4. 寺院機能の全的発揮

5. 寺院行事の開発

6. 食事の言葉による教化
7. 現在帳の作成

このなかで真保師は、宗祖弘法大師の根本精神である真言密教の大本は、「即身成仏の実現をはかり、秘密莊嚴の世界を開拓していくこと」がつくしあいの教化理念であるといい、その社会的・現代的意義として、「つくしあい運動は、生命の不安に安心を得させ、現代人に生きがいをもたせ、人間性を回復せしめる」ことにあると述べている。

さらに、その実践活動については、運動の拠点としての本山の整備、仏壇のまつりかたの指導、廻向だけではなく、祈願所としての寺院機能の開発、つくしあいの教化理念が貫かれた寺院行事の開発などであり、具体的に教師が取り組むべき実践を説いている。

この中で、つくしあい手帳の活用方法としては、檀信徒に配布し、その内容について定期的に檀信徒と話し合いを重ねることをとおして、信仰心を培養していくことなどを提唱されている。^[注4]

つくしあい手帳は、その後、昭和47年2月に「つくしあい手帳」(教師用の表記は「手帳」)として、檀信徒向けのものも発刊されている。檀信徒向けの手帳には「生きる力—つくしあい—」という表題がつけられている。扉には『この聖典は、真言密教の教えを生活に実践する「つくしあい運動」の定本として編纂されたものである。』と記されており、その内容は、つくしあい運動の「信条」と「誓い」、そして勤行の次第に続いて「つくしあいの理念」が記される。

「信条」

一、ご本尊さまに帰依し、縁起の真理を

体して、この身がご本尊さまと一つのいのちである、ゆるぎない安心を確立しよう。

一、正しい智慧により、マンダラ世界に生きる真実なる自己に目ざめ、弘法大師のおしえを現代にひろめよう。

一、心と言葉と行ないを調べ、共につくしあう、和合と創造の生活を実現しよう。

「誓い」

一、大いなる力にめざめ、尊いのちを生かします。

一、迷わず、怖れず、力をつくして励みます。

一、つくしあいの家庭と社会を築きます。

「つくしあいの理念」

第一章 つくしあいのよりどころ

第二章 つくしあいへのみち

第三章 つくしあいの生活

第四章 つくしあいのよろこび

このなか、「つくしあいの理念」の各章を読んでみると、読者の現代的な感性を考慮してか、譬喩を用いた詩的な文章で綴られており、平易ではあるけれども抽象的で一読しても真言宗の教えや、つくしあいの考え方をすぐに理解できるような文章ではなく、相当の説明が必要なように思われる。

このことについて、当時、教化研究所の研究員であった岡田昌道師は、手帖を檀信徒に配布したあとの「教師各位の個性による働きかけである教化こそ大切であり、その余地を考えてのこと」（「つくしあい運動について（四）」『宗報』昭和47年5月号）であると述べている。手帖は檀信徒に配布した後に、「説明会にもっていき、そこから教化運動を展開していく」ということを想定して作成されたものであった。つくしあい運動は当初から「僧俗一体」ということ

が強く意識されていた故に、手帖を介しての教師と檀信徒の相互教化が目指されたのである。

5. つくしあい運動の変容

昭和47年には、つくしあい手帖の活用をテーマとした教化推進会議が全国40ヶ所の会場で開催されている。この年から教化推進会議は、教師だけでなく寺院総代も参加するようになった。

『宗報』には、「教化推進会議各地区で開催」（昭和47年6月号）とあり、京阪教区・北陸教区の合同教化推進会議について報告されている。この頃、本宗ではつくしあい運動の展開と合わせて、本山の金堂再建事業と、本尊大日如来像の造立事業を抱えていた。そのため会議の内容は檀信徒必携「生きる力」（つくしあい手帖）の普及と、昭和50年に弘法大師御誕生一千二百年の記念行事として智積院金堂再建についての説明であった。全国の教化推進会議に出講した岡田昌道師は、教化推進会議の様子について、次のように述べている。

各地域全般的にいえることは、教化の推進会議である筈なのに、金堂建立の会議になってしまうことである。今回の私の役柄は、はじめに「生きる力」（つくしあい手帖：筆者注）とつくしあい運動に対する教師からの質問に答え、次に僧俗合同の席でつくしあいの理念を説明し、それによって総代さんの心に真言宗のともしびをともし、教化の推進に協力して貢うことである。そしてそのための会議がもたれることを期待するのである。然し会議に入ってからの質問や意見の開陳はすべて金堂建立の問題である。…それについても住職を援ける総代の任務を説

き、寺院の使命を説いて精一杯訴えたことがらに対し、少しも反応ないことにこちらもガックリとくるのである。住職さん方の教化の困難さが思いやられるのである。」（岡田昌道「つくしあい運動について（六）」『宗報』昭和47年7月号）

このように、教化推進会議上での檀信徒の関心は、現実課題として3年後に迫り、協力や勧募が仰がれた金堂再建事業に集まってしまい、つくしあい運動はその影にあって、浸透しづらい状況にあったようである。

岡田師は『宗報』に「つくしあい運動について」というタイトルでの連載をしており、そのなかで度々「宗団を本来的な教化団体に生まれかわらせる」と述べられている。

私は宗団論として次のような考えをもつております。先ず宗団とは本山（宗派機関を含む）と包括寺院と檀信徒の三者を合わせたものであり、この三者が一体して宗教運動を展開する、それが教化団体としての宗団であると考えます。又大師亡き後は、本山こそが教学の源泉であり、宗団は教義の当体であると考えます。この宗団に自ら進んで召されることに喜びと誇りを持つものが眞の檀信徒でありましょう。そしてこの檀信徒は限りない受益があるのです。この筋道をつけるのが私たち教師の役目であろうと思います。従ってこの受益ということを徹底的に納得させ、檀信徒の人々に宗団活動に参加して貰うのです。これが教化団体への生まれかわりだということだと思います。このように教化団体としての体質を整えるためにはお互い（住職と檀信徒）の努力が必要となります。（中略）私の場合もこの後の方策は全く立っておりませ

ん。唯遮二無二全力をつくして仏を求めて行動する者の受益を説くだけです。そうすることによって何かが生まれてくることを期待するだけです。」（「つくしあい運動について（六）」『宗報』昭和47年7月号）

岡田師の言葉には、教化宗団としての理想が語られているが、文章の最後にあるように、その理想を現実として持続させるための具体的方策については、ただひたすらにつくしあい手帖を配布し、本宗の教義にふれる檀信徒の受益を説き続けるしかなく、そのことを非常に困難に感じている様子が窺われる。

また、この頃、つくしあい運動と連動して、教化研究所より「同行二人」「大日如来」「おぶつだん」「お護摩」「お盆」「ご法事」「鐘の功德」「お彼岸」をテーマにした教化リーフレットが発行されたが、宗報では「リーフレットの使用状況」に関するアンケートがなされ、その結果が報告されている。（昭和47年10月号）

このアンケートの回答数は、依頼枚数3000通に対して281通のみで10%に満たなかつたために、集約結果はパーセント表記できず、実数による報告となった。それぞれのリーフレットの評価を「良」とする平均回答数は100前後であり、また継続使用についてもおよそ同数の結果となっている。当時は教化リーフレットも一般に活用される状況ではなかったことが窺われる。

同号には、「つくしあい運動の諸問題」として、その年に智積院で開催された布教特別講習会で提言された教化運動の諸問題について掲載されている。

このうち、いくつかを挙げれば、以下のようなものである。

- ・こうした精神的教化布教を全国的に行なうことは、本派としては近頃はじめてのことと、本末寺共これに慣れておらず態勢が出来ていない。
 - ・現代の本派教師の布教は通佛教的であって真言行者としての密教的布教に欠けており「生きる力」の活用にとまどう。
 - ・各教区長のこの運動に対する姿勢が、マチマチである。積極的な者、消極的な者、反対的な者、伝達さえない教区がある。
 - ・葬式佛教に専らの為、又は現在各寺院で行っている事で事足れりとしているのでこの運動には目をむけず受け入れる気持がない。
 - ・「生きる力」(つくしあい手帖)の内容が頗る抽象的で高度である。表現は平易で読み易いが読んだあと何が書いてあるかわからないとの声あり。
- (「つくしあい運動の諸問題」『宗報』昭和47年10月号)

つくしあい運動は教師たちの足並みを揃えるまでには至らなかったのである。また、同報告ではつくしあい運動が金堂建立事業と時期を同じくして喧伝されたため、あたかも金堂建立勧募の布石であるとの誤解も生じていたことも記されている。このような現状を受けてか、つくしあい運動はその効果を見ないような状況が続いていた^[注5]。教化運動を推進する側と、実践に途惑う末寺教師との間に距離が生まれていた状況について岡田師は所見を述べている。

「つくしあい運動は消えてしまったのではないか」という声を耳にするにつけ、まだまだ説明不足による誤解があることや、つくしあい運動そのものの問題点が

研究不足のままになっていることに気付くのである。つくしあい運動というと誰でも、一つの型にはめた教化運動と受取るのであるが、昭和四十七年度に全国的に行なわれた説明会は、「つくしあい」ということの理論の内容説明であった。これは当局の「つくしあい運動とは特別の教化運動ではなく、日常の教化にのせて実践するものである」という指導方針に基づいたものであった。謂うなれば、本派寺院のすべての教化行事の中に、つくしあいの名で現代的に展開された真言密教の教えを伝道していくことが、つくしあい運動の今日的段階である。(中略)つまりつくしあい運動の今日的段階は教化運動というよりはむしろ、教学を理解するための一つの手引き、或いは教化の場における教師の意識の統一という程のものであることが理解される。

(岡田昌道「續 つくしあい運動について—その進路をさぐる—」『宗報』昭和48年4月号)

ここで、つくしあい運動は、当初想定されていたはずの実践的教化運動から、「特別の教化運動ではなく、日常の教化にのせて実践する」ものとなっていたことが述べられている。〈つくしあい〉の語は、教師の教化に対する意識を統一せしめるもの、いわば理念として変容していったのである。^[注6]

6. つくしあい運動の終息 理念としての展開

昭和48年、内局はつくしあい運動の具体的展開策として教化規程制定案を制度調査委員会に諮ったが、委員会は規程そのものに賛意を表したもの、規程がつくしあい運動の実践のためのものであることに疑義

があるとして、その年に新たに策定された教化規程から、つくしあい運動は退けられる結果となった。このとき教学部長に就任した岡田師は、その顛末について以下のように報告している。

(委員会において)

1. つくしあい運動は、代表会で審議議決されていないので、本宗における正統の伝法方法とすることの疑義。
2. 本宗において重要な地位にある耆宿の中につくしあい運動に反対を表明する人がいる。

など（の疑義）が挙げられた。そこで委員会の代表・内局はそれらの耆宿及びつくしあい運動草創に関係深い方々を招き公聴会をもった結果、次のとき結論に到達せざるを得なかった。

1. 本宗においては、一つの型をもった宗団的規模の宗教運動を展開することは時期尚早か或いは不可能かである。
2. それなら尚更のこと、宗団を形成している以上宗団的教化の方策を引続いて研究していかなければならない。

ということであった。然らば現実の問題であるつくしあい運動をどうするのかということに対しては、

1. 「つくしあい運動」の用語を宗団的教化としては使わない。
2. つくしあいの理念（理念といつても別に新しく創り出されたということではなく、真言教義の教化的表現の意である）に納得し賛成する教師には教化の場に大いに活用していただく。
3. 今後の宗団的規模の教化活動として

の各教区における「教化会議」に対し、当局としてはつくしあいの理念をもってその指導理念とする。

(岡田昌道「これからの宗団布教教化の方向（一）—布教教化上の諸問題をふまえて」『宗報』昭和49年5月号)

ここで「教化会議」とは、当時の内局の教化方針で、教化規程にも盛り込まれたものであり、全国の教区ごとに教師と檀信徒の代表を交えて開かれる会議のことである。また、この教化規程では、教区において檀信徒連絡協議会を設置し、さらに各教区の檀信徒代表は宗務庁が開催する全国檀信徒連絡会議を組織することが定められた。内局は宗団の正式な教化運動としては否定されたつくしあい運動を、理念として教化会議の場に発揮させることを方針としたのである。

かくして昭和45年から開始された本宗の教化運動としての「つくしあい運動」は、教化規程として採用されなかった結果、ひとまず、その理念のみが当時の内局の教化方針として引き継がれるに至ったのである。つくしあい運動の発動以来、特にこの運動の展開に心血を注がれた岡田教学部長は次のように述べる。

本宗の宗団的教化の今後の方向に関し、内局の基本姿勢は「教化会議」にあることを表明したが、これに対し「つくしあい運動をひっこめて、新たに教化会議を出すのは朝令暮改的であり、一貫していないではないか」との批判がかなりあるようである。（中略）つくしあい運動の理念は、教化研究所に於て銳意研究されたもので、本宗として唯一の総合的教化研究の成果であるから、内局においては、これを中止する考えはない。実施の方法

をかえて実践に移す考え方である。

教化会議を教化規程として制度化したのは、つくしあいの理念を本宗のこれから教化の路線にのせるためである。但しづくしあい運動は教区代表会議に於て決議されたものではない等の問題があるため、つくしあい運動の語は使用せず、一般的な僧衆合同の宗教活動としていく。(中略) 宗団的規模の教化の実践からは当局からの一方的押しつけであってはならない(つくしあい運動の場合は、まだ実践の段階ではなく、説明の段階であった)から教化会議という最も民主的あり方で進めるのである。

(岡田昌道「これから宗団布教教化の方向(三)」『宗報』昭和49年7月号)

その後、教化会議がどの程度行われたかは確認できていないが、昭和50年6月15日、智積院にて金堂落成の式典があげられ、10月には智山派管長62世として芙蓉良順猊下が晋山した。しかし、その晋山に際しての挨拶文の中には「つくしあい」の語は語られない。(芙蓉良順「御挨拶」『宗報』昭和50年10月号) また、引き続いて教学部長の任にあった岡田師の「昭和五十一年度の教化に就て」という施政方針文の中にも「つくしあい」の語は確認できない。(岡田昌道「昭和五十一年度の教化に就て」『宗報』昭和51年5月号)

7. つくしあい理念の再生

「本宗においては、一つの型をもった宗団的規模の宗教運動を展開することは時期尚早か或いは不可能かである」として、つくしあい運動が終息した理由は何であろうか。宗報に掲載される議論から、伝統教学の現代教化への反映の難しさや、教師の教化意

識の不統一など、さまざまな要因が考えられるが、変化し続ける現代社会の求めに、即応できるだけの教化方策を、柔軟に発信することを伝統教団は得意としていない。^[注7]

しかし、一度は終息したつくしあい運動は、昭和52年3月になって、その年の1月に開催された「布教対策会議」の結果、再び布教教化の方針として「つくしあい」の命題を掲げて推進することが申し合わされたということが報告されている。その理由として示されるのは三点である。

一、「なぜつくしあい運動を止めたのか」という強い批判が多発しており、布教上一貫した指導理念を求める声が多い。

二、「つくしあい運動をどう思うか」という設問に対し、教師の意識調査の結果は、賛同者七五パーセントを示している。(一部修正して賛成を含む数)
三、つくしあいの命題を掲げなければ、つくしあいの理念がはっきり浮き彫りにされない。

(「本宗の布教教化 再び「つくしあい」の命題を掲げて推進」『宗報』昭和52年3月号)

この頃、真言宗各派では昭和59年の宗祖弘法大師千百五十年御遠忌にむけて、準備委員会が立てられていた。当時、高野山真言宗では「生かせいのち」のスローガンをかけたの信仰運動が始められ、真言宗豊山派では「生きる」、新義真言宗では「生かしあい」の命題を立てて準備をすすめているとの報告があり、他派の影響もあってか、智山派においても何らかの「命題」が求められるようになったと考えられる。

昭和52年5月には別所弘因師を宗務総長とする新内局に交代したが、新内局におい

では「つくしあいの理念による教化活動の展開」を基本姿勢として掲げており、教化研究所に対して「宗団教化の在り方について—特につくしあいの理念による教化活動を展開させるために」について諮詢している。^{〔注8〕}

また、中央布教師会の昭和54年度の布教方針は、「宗祖弘法大師千百五十年の御遠忌を迎えるに当たり、つくしあいの理念をふまえ、総本山を中心とした布教態勢を確立し宗風宣揚のために努力しよう」というものであり、これ以降、平成に至るまでは毎年の布教方針に「つくしあいの理念」という語が挿入されている。^{〔注9〕}

しかし、つくしあい運動は当初、僧俗一体の実践的な教化運動として企図されたからこそ、一般社会を意識し、真言教学の一端を象徴的に〈つくしあい〉という言葉で表現したのであって、これが僧俗を含めた教化運動であることを止めてしまい、教師だけの理念として残されたとするならば、本来所依とするべき広大で深義を有する真言教学の深みを、結果的に限定的かつ矮小化させただけに過ぎないのでないだろうか。

ややもすると、教師が掲げる「理念」としてのつくしあいは、その言葉の本質であつたはずの「教学」の伝統そのものを覆い隠してしまうきらいがあろう。そのためか、つくしあい運動が終息して以来、本宗では振り戻しのように再び伝統教学が見直されるようになる。その傾向は、昭和62年に教化研究所が発展的に解消し、智山伝法院として再出発する前後において顕著になっており、宗報の内容も学究的な色彩が強いものになっていく。このことは教化研究所の長澤初代所長が求めた「教化ということが根を下ろすため」の一つの支柱を、宗団が再び求めはじめたようにも窺われるるのである。

8. おわりに

本稿では詳しく扱えなかつたが、平成7年にいたつて智山教化センターが発足する。智山教化センターもまた、智山伝法院の発足以降にみられた伝統教学への偏重からの振り戻しのように、再び社会に向けた実践的な活動の充実が求められた結果として誕生したようにも見受けられる。このように本宗のあゆみは、社会の動向と照らしつつ宗団としてのありようを常に反省しながら伝統教学と現代教化を駆使してきたのである。^{〔注10〕}

つくしあい運動から50年。〈われわれの先賢たちは、戦後日本の新興宗教の伝道に対抗して、教化の先鞭をつけてくれました。しかし今日の教化は、その当時にくらべて本質的にどれほど進歩しておりますか。教化ということが根を下ろすために、またその場かぎりのものでなく将来の路線を確定するために・・・〉本稿の冒頭に引用した50年前の長澤所長の言葉は、現代の反省にも通じるのではないか。長澤所長が言及された教化の支柱。しかし、それを求めるための試みは、いまや近代伝道学の方法、原語から味読する聖典研究、教化活動の宗教社会学的な考察・調査と反省だけに止まらない。もっと広い意味での社会学や、歴史学的な考察、統計学的な知識による教化活動の反省など、研究すべきテーマは多岐にわたる。それらの研究をとおして令和という時代において、教化というものの支柱を定め、その上で教師自らが寺院という場で社会にむけて行動していくことこそが、先師の足跡を継ぎ、宗団の未来を確かなものにする新たな一步となると確信している。

【注1】戦後、眞言宗智山派が復興して以来、宗内において教化方策の必要性が頻繁に議論されていたが、教化の語が意味する内容については、発言者の意図や文脈によって一定ではなかった。長澤所長の発言にみられるように、明治期には国内に展開したキリスト教への対抗意識から、当時、伝統教団において社会に対する教化（キヨウケ）の重要性が叫ばれ、口説布教などが積極的に行われるようになったことは確かである。しかし、大正期に政府主導の社会教化（キヨウカ）運動に合流するかたちで、宗内においても社会教化の名のもとに慈善事業や社会活動などを推奨されたために、教化という語が表すものは、布教の意味だけでなく、社会活動の意味も含まれるようになり、そのことが教化の概念が定まらなかった理由の一つにあると思われる。戦後の『宗報』において教化という言葉が用いられる場合には、社会事業の意味ではなく、主に口説による教義の「布教」という意味で用いられている場合が多いが、さらに新興宗教への対抗意識から、単なる口説布教だけではない、さまざまな教化の方法論が議論されるようになった。このように近代以降、教化の概念は重層的に変化してきたといえるが、長澤教化研究所所長の言葉は、戦後の本宗における教化の概念をはじめて明確に示したものであった。

【注2】昭和30年代後半から、他宗団において一斉に教化運動を実施している。本宗のつくしあい運動は他宗団にならうように、最も遅れて開始されたものであった。つくしあい運動の教化資材として昭和45年に発刊された教師用つくしあい手帳に、各宗団で展開している教化運動の名目として、日蓮宗の護法運動、禪宗（曹洞）の三尊仏運動、臨済宗（妙心寺派）の花園会運動、淨土宗のおづき運動、禅林寺派のみかえり運動、大谷派の同朋会運動、豊山派の光明曼荼羅運動、高野山眞言宗の合掌運動、大覚寺派の写經運動等、天台宗の一隅を照らす運動が示されている。

【注3】「つくしあい運動」の理念の項目と具体的な展開（昭和44年9月8日）

1. 即身義にある如く、法界法身の三密、即ち大いなるものの活動のあり方が、本来圓融無礙にして相即渉入し合っている。つまり現代語で表現するならば相互に「全くし合っている」のが大生命の実相である。
2. この大いなるもののあり方を現実の生活、実践の場に導入するとき、限りあるものの我々が、この大いなるのちに生きる基本の生活方式も、当然お互いに「全くし合って」いく生活でなければならない。
3. 教化運動の本質的あたり方も、僧俗挙げて「全くし合って」いく、この本来的にして積極的な和合・創造の生活を実現させるべく指導すべきである。
4. 即ちこの教化運動の主眼点は、真言密教による信仰の徹底と本来の人間生活を創造する生活革命にほかならない。

教理の背景：『即身成仏義』のほか、金剛界曼荼羅の成身会、十六大菩薩と四波羅蜜、八供四攝菩薩。

目的：密教精神に基づき、僧俗一体による信仰運動を展開し、真に明るい家庭・平和な社会を建設する。

1. 在家仏壇の正しいまつり方の徹底
本尊（大日如来）を中心とした信仰のよりどころとしての正しいまつり方。
2. 機関誌の発行
檀信徒各自に同信・同行であるという自覚を持たしめ（生きる力を与え）、生きた寺檀関係をつくりあげる。
3. つくしあい手帖の配布
本尊・宗祖・勤行式・つくしあいのよりどころ・心・生活・喜び等の解説。仏教聖歌集などを内容としたハンドブックを配布する。
4. 教師用テキストの編集
寺院における「つくしあい」の具体例を中心に、教理的な背景を説明したテキストの編集。
5. 文書伝道、考えられるあらゆる文書伝道の実践。
6. 寺院における活動
行事その他の住職として、教師として接するあらゆる場面に「つくしあい」のこころを徹底させる。
7. 在家檀信徒の活動
檀信徒は、寺の仕事をはじめ、日常生活の中において「つくしあい」を実践していく。

【注4】当時、智山派第六十一世化主に晋山された竹村教智管長は手帳について以下のように述べられている。

「また当局におきましても、宗団本来の使命である教化の面に強く打出しております。当然のこととは存じますが、往々にしてこの問題が軽しめられる現況にありますので、機を得ることと強く感じられるものであります。前能化さまが僧伽の再検討を強調なさいまして、その理念が皆様のお手許に配られました、「つくしあい手帳」であります。僧俗共にこの「つくしあい」の基に本宗の時代に生きる道としたいと存じます」（竹村教智「御挨拶」『宗報』昭和46年10月号）

【注5】教化資材として出版された「つくしあい手帖」の活用も広くは浸透せず、実践的な発現をみないまま、理念的なものとして止まってしまっているかのように窺われるが、宗報上では「つくしあいのたり」というコラムが連載され、その内容は各寺院の寺院行事が毎月紹介され、そのなかでの教化を意識した創意工夫が報告される。寺院行事とは「施餽鬼会」（昭和48年5月号）、「お盆」（昭和48年6月号）「早おき写経会」（昭和48年7月号）「暁天講座」（昭和48年8月号）「七五三」（昭和48年10月号）「成道会」（昭和48年11月号）「除夜の鐘」（昭和48年11月号）「掲示伝道」（昭和48年12月号）などである。これらは昭和47年に教化研究所が発刊した『これから年の年中行事』に対応する内容である。

【注6】また岡田師は同号において、教化運動としてのつくしあい運動を当局が行わなくなってしまった理由として、真宗大谷派で起こった同朋会運動の顛末を参照している。真宗大谷派の同朋会運動は、昭和37年に真宗大谷派の宗務総長であった訓勵信雄師によって始められた信仰運動であり、新興宗教の台頭から、真宗教団のあり方を反省し、それまでの教団と門徒という関係のなかで生まれる信仰ではなく、門徒一人一人が親鸞の教えと信仰に目覚めていくことを目指す宗門改革運動であった。しかし、この運動は結果として大谷派の保守派閥との対立を招き、訓勵総長はその役職を追われることとなった。岡田氏は、同朋会運動が本来的な教化運動であったにも関わらず、その結果となった要因は、大谷派教師が追従できなかったことにあるといい、そこには一般的の門徒の側に、本格的な宗教運動を拒否する現代的質があり、それらが障壁になったという見解を示している。岡田師は、つくしあい運動も同朋会運動のような本格的密教実践運動であったが、それだけに一つの型をとった運動として展開するためには、相当の覚悟が必要であり、そのための周到な準備がなければならず、つくしあい運動の今日の段階もまた、そのつくしあい運動遂行の準備の段階であるとい。

【注7】当時、教化研究所の研究員であった福田亮成師は、つくしあい運動について以下のように回想している。

既成宗団が、現在社会に一步を歩み出すか、あるいは逆に社会からある問題をつきつけられるかと立往生してしまう。（中略）先の「つくしあい運動」も、一步ふみ出すと、それは大衆にむけての信仰運動というより、教師の再教育運動に質的に変化せざるえなかつことは事実であったろう。この運動が社会に一步ふみ出すためのエネルギーの結集とはならなかつことは、既成宗団の宿命なのであろうか。他の宗派が行っている信仰運動も多かれ少なかれ、同じ問題をかかえていることは学者によって指摘されているところである。（福田亮成「伝統教団の危機」（『宗報』昭和61年8月号）

【注8】これを受けて研究所では昭和52年・53年度の両年度で分析研究にあたることになった。その研究項目は「宗団体制について」「カリキュラムの問題」「他宗団における教化運動の調査研究」であった。（『宗報』昭和52年9月号）。これらの研究に対する答申は昭和54年に提出された。

【注9】昭和55年以降の本宗の布教方針は以下のとおり。

昭和55年度 「宗祖大師御恩忌の聖業の達成するため告諭の精神を体し、つくし合いの理念をふまえて僧俗一体となって布教活動を強力に展開しよう。」

昭和56年度 「宗祖大師御恩忌の聖業の達成を期し、つくし合いの理念のもと生きる力の限りを展開しよう」

昭和57年度 「宗祖大師御恩忌の聖業を期し、つくし合いの理念をふまえ己が使命の完遂をはかろう」

昭和58年度 「宗祖弘法大師千百五十年御恩忌にめぐり遇う、この身のしあわせを欣び、つくしあい理念のもと、一、南無大師遍照金剛に帰一しよう。」

スローガン 「つくしあおう いのちのかぎり」

昭和59年度 「宗祖弘法大師千百五十年御恩忌奉修の円成を期し、拳宗僧俗一体。」スローガン 「つくしあおう いのちのかぎり」

昭和60年度 「生きる力—菩提を求めて」

昭和61年度 「生きる力—慈悲をいたいで」

昭和62年度 「両祖大師の教義を宣揚し、総本山を中心とした一宗信仰の確立を目標とし、「生きる力」を基につくしあいの理念による教化活動を行う」

昭和63年度 「両祖大師の教義を宣揚し、総本山を中心とした一宗信仰の確立を目標とし、真言行者に徹し、積極的に教化活動を行う」

平成元年度 「両祖大師の教義を宣揚し、総本山を中心とした一宗信仰の確立を目標とし、真言行者に徹し、つくしあいの理念に基づいて積極的に教化活動を行う」

【注10】本稿で扱えなかった智山伝法院の発足当初の活動の詳細、そして、そのなかでの「つくしあい運動」の反省と総括をめぐる議論の周辺については、先学の研究を参照されたい。

小室祐光「現代教化に関する諸問題」『現代密教』第6号

鈴木晋一「つくしあい理念の矛盾と曖昧」『現代密教』第8号

片野真省「教化宗団眞言宗智山派における宗団教化の可能性—「宗団教化」というこれまでの常識に対する私論」『現代密教』第8号

2 人口減少社会の光と影～教化の可能性を探る

智山教化センター 所員 磯山正邦

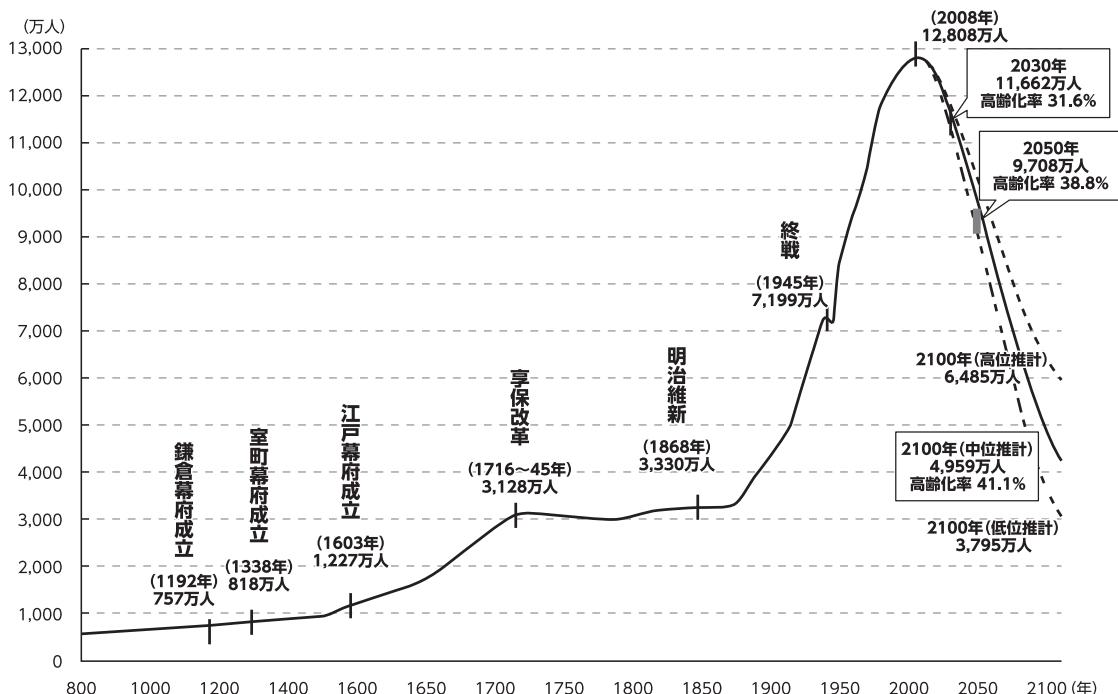
1. はじめに

堺屋太一の『平成三十年』という小説をお読みになったことがあるだろうか。朝日新聞朝刊に平成9年から10年にかけて連載されていた、いわゆる、未来予測小説である。今から15年ほど前に文庫本が上下巻発刊されているが、上巻のサブタイトルには「何もしなかった日本」とある。平成の終わりを迎えるにあたり、ここ数年、この小説が再度脚光を浴びている。その理由は、小説のなかでの出来事（＝予想）が、現実に起こっているからだ。例を挙げれば、首都機能移転は実現できず、東京の一

極集中が続く。ネットコンビニ（インターネットで注文すると指定時刻に希望の商品が届く）が普及する。晩婚化が進む。年間出生数が100万人を割る……等である。特に年間出生数は数字も具体的に当たっているので、この小説の先見性、堺屋氏の洞察力を再認識させられる。

しかしながら、人口動態予測というものは、景気や経済の予測と違って、確度の高い予測といわれている。堺屋氏が小説を著した平成9年ごろに、当時の国立社会保障・人口問題研究所のデータを元に、この予測をしたことは想像に難くないが、だからこそ、この研究所の予測する2050年や2100

図表1



(出典) 総務省「国勢調査」、国土庁「日本列島における人口分布の長期系列分析」、国立社会保障・人口問題研究所「日本の将来推計人口」

年の人口動態等も、現実性を帯びて我々に迫ってくるのである。(図表1)

智山教化センターでは、毎年度発刊する『年報』において、下記のとおり「人口減少社会・過疎問題」についてレポートをしてきた。

・第18号（平成25年度）

1. 過疎とは何か～国の施策から見る過疎問題
2. 浄土宗、浄土真宗本願寺派、日蓮宗の過疎問題への取り組みについて
3. 本宗（寺院）の過疎化の現況は、どうなっているのか？

・第19号（平成26年度）

1. 大都市圏の寺院に過疎問題は関係ないのか
2. 人口減少社会と過疎問題へのあらたな視点
3. 地方から都市部に移り住んだ檀信徒に対する他宗派の取り組みについて—浄土真宗本願寺派・浄土宗の事例—

・第20号（平成27年度）

1. 人口減少社会から考える兼務寺院の将来
2. 人口減少社会—家族と出生率
3. 地域から他出した子どもが、親はどうつながり、寺院とどう関わっているか—広島県三次市作木地区調査から—

・第21号（平成28年度）

1. 人口減少社会・過疎問題の視点からみた寺院活動調査の報告

・第22号（平成29年度）

1. 人口減少社会を知る～なぜ、人口は減少するのか
2. 過疎といわれる地域でのペット葬の可能性—石川県七尾市E寺（高野山真言宗）の事例から—

これまで、人口減少社会に光明を見出することを念頭に各レポートを書いてきた。しかしながら、現在は、人口減少社会に光明はあるのか、闇なのではないか……考えは逡巡して迷走状態である。今回のレポートでは、過去5年の『年報』レポートを踏まえた上で、新たな視点を加味して、人口減少社会の「光と影」を併記することで、今後の教化の可能性を探りたい。

2. 人口減少社会 一光一

人口減少社会を悲観的に考えずに、肯定的に捉える……この観点の中核を成すのは「人口トレンドの見方を変える」ということである。つまり、価値観の変換である。

日本は明治時代からの100年で人口が3倍以上増加した。これは日本の歴史からすれば本来異常なことであるが、政府も国民も異常が100年続くと、人口増加が常態だと思うようになってしまった。そして、この発想から抜け出せないでいる。この「人口増を是とする価値観」からどれだけ抜け出せるか。これから100年で日本の人口は半減する。この人口減少社会を常態と考えればいいのではないか。(図表1)

「富国強兵」というスローガンを掲げ、結果として先の大戦では敗戦したが、戦争勝利という目標が戦後は「経済成長」に取って代わっただけで、上昇への強迫観念からは脱出することができなかった。人口減少社会は、そのような柵（しがらみ）から脱け出し、眞に豊かで幸せを感じられる社会を創出する千載一遇の機会ではないのか。

また、諸外国と比較しても、面積が日本とほぼ同じであるドイツは人口約8200万人、フランスの面積は日本のほぼ1.5倍であるが、人口は約6300万人であり、現在の日本の人口（2019年3月時点）で1億2622

万人）が絶対に維持されるべき水準と考える理由はどこにもないのではないか。

主にこれらの理由から、現在よりも人口が減少したほうが、日本という国・国民は、空間的、時間的、精神的なゆとりが生まれ、環境・資源問題等でも、さまざまな面でプラスになると考えるのである。人口減少の主たる原因は少子化であるが、「少子化が進むと経済が減退するから出生率を上げねばならぬ」とか「人口が減少すると国力が下がるから出生率を上昇させるべき」という少子化についての価値観を転換する。すなわち、高度経済成長期の価値観の枠組やその延長線上で人口減少問題を考えることを止めて、人口減少社会に光明を見出そうとするのである。

さて、高度経済成長が始まった1960年代から急激な都市化が始まったが、1970年代には「地方」で「過疎」が進行していると国が対策に乗り出した。産業の構造転換や都市化に伴う、農村部から都市部への人口流出が原因であった。それから40年を経てようやく厳しい現状が全国規模で実感されるようになった。過疎地域の人々が今まで経験してきたことが、「人口減少社会」として「都市部」を含めた日本全体に広がりつつあるということである。この人口減少に対して、寺院はどのように対応するべきなのか。興味深い提言をしている学者がいる。

熊本大学名誉教授・農村社会学者の徳野貞雄氏である。徳野氏は、これから寺院が重視すべきは、人口減少対策よりも「檀家分散極小化」への対応である、という。

「従来、寺院と檀家の関係は、信仰の強さや宗教的行事の展開といった宗教学上の視点からアプローチされることが多かった。しかし、過疎化や生活構造の変化（世帯と家族の変化）に伴う檀家の生活構造と寺院の存立基盤といった地域社会学的な視

点からアプローチすることが必要である」

徳野氏が先ず、われわれに問いかけるのは、「家族と世帯」の混同である。現代の日本人は「家族と世帯」のことをほとんど分かっていない、という。あなたと一緒に住んでいない次男は家族ではないのか、単身赴任のお父さんは家族ではないのか？

「世帯」という概念は1920年の国勢調査の時に作られた統計上の概念であるが、対して「家族」は実体はあるが、捉えどころの難しい抽象的な包括概念であり、民法上の定めもない。例えば、現代社会の諸相を示す現象のひとつに「独居老人」がある。家族から見離された孤独な老人、といったステレオタイプなイメージを抱く人も多いかもしれない。しかし、徳野氏は次のように分析する。

「過疎地の集落から多くの若年層が流出したと考えられているが、どこに流出したかは研究されてこなかった。私の研究では、流出した子供たち（他出子）の15%が地元の自治体、25%が近隣の自治体、そして35%が県庁所在地など地方の中核都市に居住している」

一度遠くに出ていても時間の経過とともに、実家の親の近くや知人の多い生活基盤が安定した故郷に帰郷する「移動型の生活構造」を多くの人々が持っているのである。元来、寺院と檀家の関係は「定住型の生活構造」の上に成り立っていた。しかし、現在は檀家（=家族）の概念は変容している。つまり、現在の寺院体制や宗教的活動の問題点は、人口減少や見た目の祭祀継承者がいなくなったりしたことで発生しているのではなく、本質的には定住型社会から移動型社会へ急激に転換したことに（寺院が）対応できないことなのである。

過疎地の老人は、過疎が続いてもこの地に住み続けたい、と考える人が多い。その

理由は、長年暮らしたその土地への郷愁、愛着といったこともあろうが、それだけでは老人が暮らしていくことはできない。徳野氏の研究によれば、他出子は過疎地の実家を日常的に具体的にサポートし続けている。だから、過疎地や限界集落とラベリングされても人々は暮らしていくし、これからも暮らしたいと考えるのである。つまり、世帯は縮小化しても「家族は空間を超えて機能」しているのである。

徳野氏は警鐘を鳴らす。日本は最近10年で約300万人の人口が減少しただけである。この表層的な社会現象の変化に「人口減少社会」というキャッチフレーズで過剰に社会的危機を（メディアや政府は）釀成しているのだと。徳野氏は断言する。檀家と寺院体制の変化は「人口減少」ではなく「世帯と家族の変化」という世帯の分散・極小化と新しい家族単位に対する認識不足から発生しているのだと。

現代の社会現象の変化は、お決まりの人口減少論で処理されることが多いが、その変化の根幹は、人々の生活の基盤である世帯・家族の社会的移動によって引き起こされている。徳野氏の提言に「人口減少社会」における「寺檀関係」のヒントが隠されているのかもしれない。

3. 人口減少社会 一影一

残念ながらというべきか、「人口減少社会」におけるネガティブな視点、楽観的ではない予測は枚挙にいとまがない。そして、そのどれもが寺院や宗団が対策を講じられる範疇を超えている。

「人口減少」という言葉がメディアを賑わせることが近年多いが、実際に人口減少が確認されたのは2015年発表の国勢調査からである。1920年の初回調査から約

100年、初めての人口減少となった。この人口減少を肌で感じることはないかもしれないが、真綿で首を絞められるかのように我々に迫っている。直近の日本の総人口を確認してみよう。2018年4月1日の総人口は1億2650万人、2019年3月1日の総人口は1億2622万人。11か月で28万人の日本人が「減少」しているのである。

経済や景気の予想と違って、人口予測は確度の高い推計を出すことができるといわれている。国立社会保障・人口問題研究所（以下、社人研）が定期的に「日本の将来推計人口」を発表しているが、それによると2065年には日本の総人口は9000万人を下回るらしい。この予測値は、よくメディアに散見されるので、あまり驚く数値ではないかもしれない。実は社人研は冗談かと思うような、さらに先の将来推計人口まで算出している。もちろん、机上の計算ではあるが、今から200年後には約1380万人になり、西暦3000年には、なんと日本の総人口が約2000人になると予測している。もちろん、この数値になる前に日本という国家は消滅しているかもしれない。しかしながら、社人研が日本人の「絶滅」まで数字を出しているということが「人口減少」の深刻さを物語っている。（図表2）

そこで我々に直接関係してくる「暗い」将来予想をいくつか挙げたい。

・少子化の加速

2016年の年間出生数は約97万7000人となり、初めて100万人を割った。しかも、これは経過であり少子化は加速する。2065年には出生数は約55万人になるといわれている。出生数の減少はどのような影響があるのだろうか。子供の絶対数が減少するので、例えば各業界において今までのように人員を各所に配置できなくなる。景

気に関係の無い「絶対的な人不足」である。それは、寺院、檀信徒とともに「絶対的な後継者不足」を意味する。

・ひとり暮らしの増加

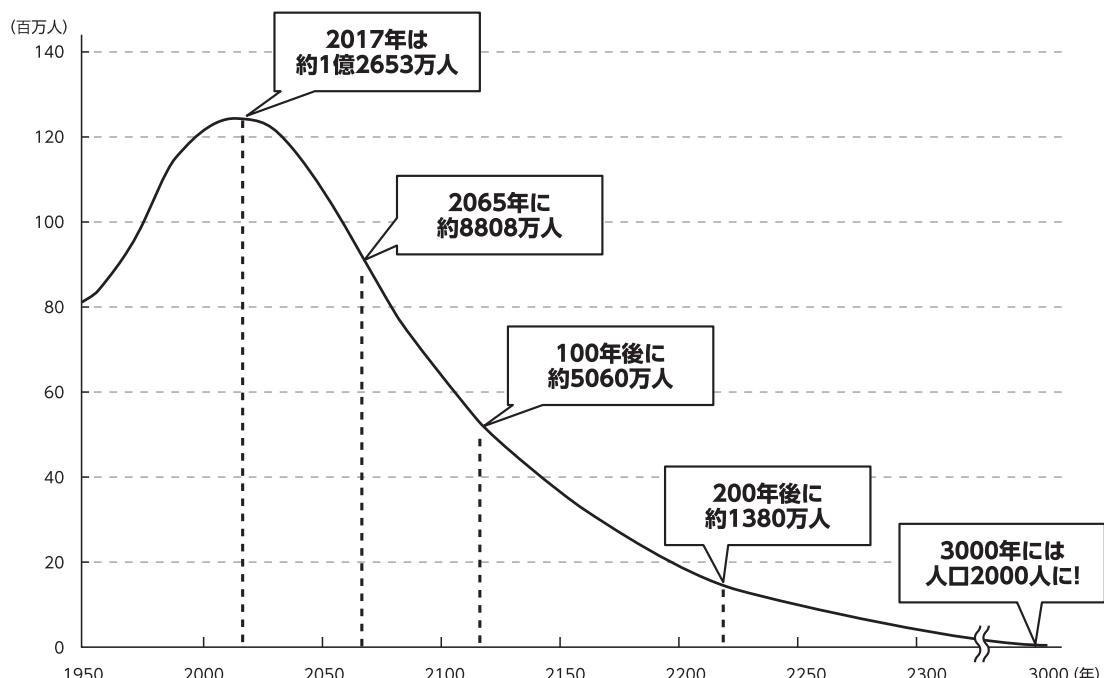
「ひとり暮らし世帯」は20年以上前の1995年ごろから全世帯数の25.6%となり大きな問題を孕んでいた。そして、2010年には「夫婦と子供世帯」の27.9%を抜いて、「ひとり暮らし世帯」は32.4%を占めるようになった（総務省統計局のデータより）。「ひとり暮らし世帯」が増えた理由はいくつかあるが、主だった理由は「子供と同居しない高齢者の増加」「未婚者の増加」「離婚の増加」である。ひとり暮らしが日本の主流になることが避けられない状況であるが、このことが意味することは何か。それは「家族が社会の基礎単位」という考え方方が成り立たなくなるということである。

る。とりもなおさず、それは現行の「檀家」という概念の消滅である。

・高齢社会から多死社会へ

社人研の推計では、年間死亡者は2030年に160万人を突破し（2018年は約137万人）、2039年には168万人になりピークを迎える。死亡者数の増大で懸念されることは、火葬場の不足である。特に本宗寺院の多い一都三県（東京、神奈川、埼玉、千葉）は高齢化が急速に進むので真っ先に影響を受けそうだ。葬儀が増加する、などと安易に考えないほうがいい。将来的に火葬場の空き日程が無い状況が想定される。火葬場の予約取りが激戦になり、「葬儀日程は菩提寺の住職の都合を聞いてから」というプロセスが今以上に崩れる可能性がある。すると、1日葬、直葬といった「葬儀の簡略化」がさらに進行するだろう。

図表2



（出典）国立社会保障・人口問題研究所「人口統計資料集」（2017年）より

4. 人口減少社会における教化の可能性

「人口減少社会」について、その概要や影響に関して、人口学者や社会学者の意見を聴いたり、ネガティブな将来の各種数値データに触れて「人口減少問題を考える」というような時期は疾うに過ぎた。これからは、「人口減少社会」において、我々はどのような教化活動ができるのかを考え、それらをひとつひとつ効果測定して、檀信徒にピンポイントで「響く教化」を創出していくことのほうが重要である。

人口減少と併せて問題視されるのが「高齢化」である。現代は、戦後間もない頃と違い、生まれた赤ちゃんは、ほとんどが元気に成長し、80歳を越えても元気に社会的、経済的な活動をしている「老人」が多い。これは100年前の日本人が見たら夢のような世界ではないだろうか。世界に目を向けてもマレーシアのマハティール氏は92歳で同国首相に返り咲いており、今なお現役である。

数十年前までは、国民の平均余命が伸びる度に「長寿社会」といって好意的に捉えていたはずである。いつのまにか「長寿社会」という言葉が無くなり、「高齢化社会」というネガティブなイメージを抱かせる言葉に取って代わってしまった。「日本から高齢者を減らすのは簡単である。高齢者の定義を65歳から75歳に引き上げればいいだけだ」と冗談のようなことをいう学者もいるが、元気な「高齢者」が多い昨今、あながち冗談ではない提案のように思えてくる。

若い世代と比較して、高齢者と宗教の親和性が高いことは容易に思い浮かぶことである。自分の人生の最期が近づくにつれて、宗教に関心が向くのは、ごく自然の流れであろう。シニア向け産業の市場規模は高まっており、「終活」が流行るのも、そ

の一端である。

だからこそ、我々は「青少幼年教化」ならぬ「高齢老年教化」の可能性をもっと具体的に掘り下げる必要があるのではないか。1990年の高齢者（65歳以上）人口は約1500万人だったが、2040年には高齢者人口が約4000万人になる。日本は人口減少社会ではあるが、宗教に一番親和性が高いと思われる高齢者は、以前とは段違いに増加しているのである。この年代のニーズに我々は応えていけるのか。人口減少をチャンスとして活かすためには、この年代への教化アプローチを再構築する必要がある。（図表3）

また、第2章「人口減少社会一光一」でも述べたが、徳野氏の「世帯は縮小化しても家族は空間を超えて機能」している。これは、具体的にいえば、統計上は独居老人でも、車で30分くらいのところに、息子夫婦等が暮らしていて、家族は同じ世帯ではなくても（空間を超えて）機能している、ということである。空間を超えて機能、というところで重要なのが、同じく「空間を超えて機能」しているインターネットの存在である。近年、高齢者のインターネット利用率が増加している。2016年に実施した総務省の通信利用動向調査によると、「1年に1回以上 インターネットを利用したことがある」という調査に対して60歳～69歳で76.6%、70歳～79歳で53.5%の人々が利用したことがあると回答し、非常に高い結果になった。インターネットの利用用途も、「電子メール」「ネットショッピング」「交通情報」「天気予報」と多岐に渡り、Webサービスに対するニーズの高まりがわかる。しかしここで私がいいたいことは、「お寺でホームページを作りましょう」とか「FAXよりもE-MAILのほうが便利です」といった前時代的な提案では

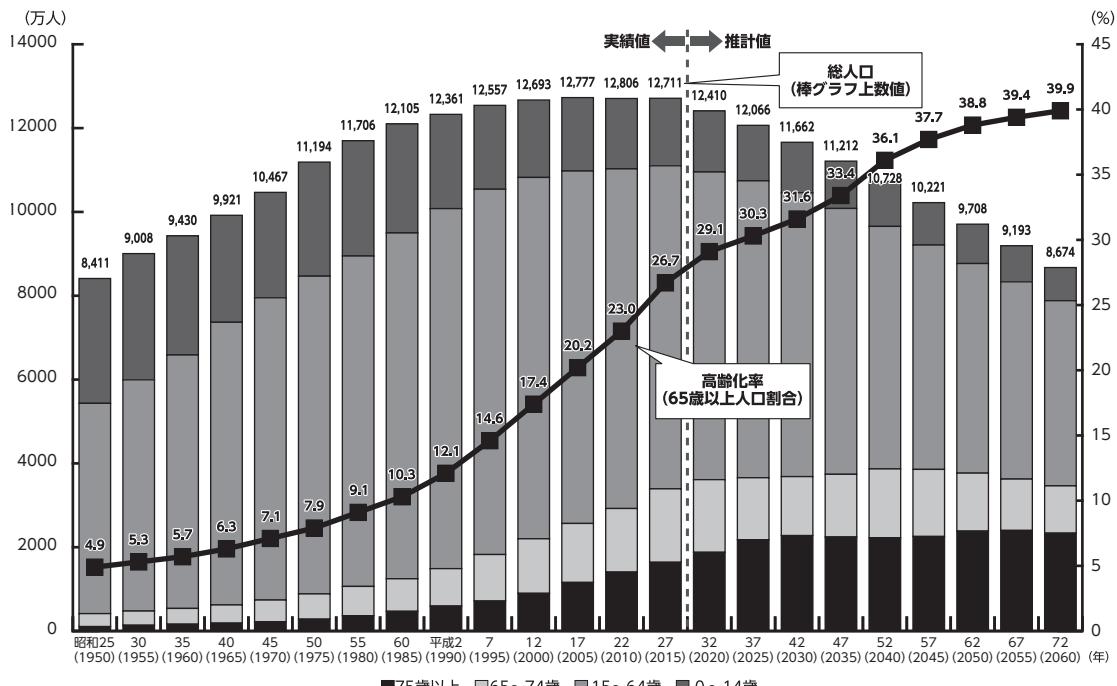
ない。我々が、インターネットを単なる便利なツールとしてではなく、「空間・世界」として存在価値を認めることができるかということである。

『インターネットは僕の宗教 (The Internet is My Religion)』というアメリカ人のジム・ギリアム (1977-2018) が著した自伝がある。詳細は省くが、難病に罹った著者がインターネットを通じて幅広い人々と繋がり、助けを得て、「インターネットは、キリスト教原理主義の地獄と、無神論という絶望から僕を救ってくれた。それは僕の命さえ救ったのだ」と思うようになるのである。そして、神の働きとは、互いに繋がりあった人間同士のことなのだと考えるようになったという。もちろん、「インターネットが僕の宗教である」という著者の意見には異論反論があろうが、宗教が

担保すべき領域の一部を占めていることは間違いない。

話は戻るが、つまるところ、檀信徒が、あの世という空間、この世という空間、さらに「インターネットという空間」の3つの世界を生きている、という共有認識を持つことができるかが今後重要になってくる。サイバー・スピリチュアリティといったインターネット技術がもたらす新しい精神のあり方も最近話題になってきているし、すでにそこにおける宗教絡みのトラブルも耳にする。ただ、インターネット空間を宗教的と考える人が増えたとしても、そこに「人は死んだらどうなるか」という人間の根源的な欲求ともいえる質問に対する回答はない。そこに我々の教化の活路を見いだすことができよう。

図表3



資料：2010年までは総務省「国勢調査」、2015年は総務省「人口推計（平成27年国勢調査人口速報集計による人口を基準とした平成27年10月1日現在確定値）」、2020年以降は国立社会保障・人口問題研究所「日本の将来推計人口（平成24年1月推計）」の出生中位・死亡中位仮定による推計結果

(注) 1950年～2010年の総数は年齢不詳を含む。高齢化率の算出には分母から年齢不詳を除いている。

3 教区における通称御詠歌オペラの展開—上総第三教区の事例—

智山教化センター 所員 中嶋亮順

1. はじめに

正式な名称を“御詠歌・声明・法話”で綴る「お大師さまのご生涯」とする「通称御詠歌オペラ（以下：御詠歌オペラ）」が平成25年3月に初演を迎えてから5年が過ぎようとしている。この御詠歌オペラは、より多くの人々に御詠歌に親しんでいただくとともに、推奨する教化活動の1つである御詠歌のさらなる発展を目指し、檀信徒教化推進会議の新たな提案という形で作られたものである。

本報告は、御詠歌オペラのこれまでを振り返るとともに、実際の事例を踏まえながら今後どのような展開をみせていくのか考察していきたい。

2. 御詠歌オペラの内容

まず御詠歌オペラがどのようなものであるのか振り返っていきたい。この御詠歌オペラは、これまで御詠歌に触れることのなかった一般の方に、御詠歌に親しむ機会をつくるべく、公演という形式で考え出された。御詠歌だけではなく、声明や法話、プロジェクターを活用した映像を交えることで肩の力を抜いて楽しんでいただき、親しみを覚えてもらえるようなものとして考案された。「お大師さまのご生涯」という演目で編纂されたシナリオは、御詠歌の歌詞を中心としてお大師さまの一生を追っていく。ステージにはお大師さまにまつわる映像を映し、視覚的にもわかりやすい内容となっている。上演の最後には、会場の参加

者とともに「同行和讃」をお唱えし、ただ座って観ているだけではない参加型のシナリオである。

このシナリオに関しては、出演者が集まる機会はそう多くは取れないため、少ない練習時間でも公演できるように、2～3回の全体練習の時間を設ければ実施できる内容とした。

3. 開催の実績

平成31年3月時点で、通算25回の上演が報告されている。そのうちの15回が檀信徒教化推進会議であり、2つの教区では2回の開催がなされている。また、関東八十八ヶ所靈場会大会や真言宗十八本山お砂踏みなど、本宗檀信徒以外の方も多く集まる場でも開催されている。平成29年に教化センター主催で開催した檀信徒研修会で上演した御詠歌オペラについてのアンケート結果を例に取ると、アンケートに有効回答をしたうちの、90.9%が大変良かった・良かったと回答をしている。主な意見として「御詠歌が素晴らしかった」「気分が変わって御詠歌を楽しめた」などがあり、当初の目的である「御詠歌に親しむ」というものが概ね達成できていると考えられる。

4. 上総第三教区の事例

今後の御詠歌オペラの可能性を探るため上総第三教区の例をみてみよう。上総第三教区では、独自に「法楽紙芝居 お釈迦さま物語」という演目で御詠歌オペラを

実施している。この「お釈迦さま物語」は平成30年10月14日に千葉県にある君津市民文化ホールにて開催された檀信徒教化推進会議のなかで実施され、約600名の檀信徒が参加した。お釈迦さまの生涯を題材として取り上げ、お釈迦さまにまつわる御詠歌を中心に、声明や遺教経などでお釈迦さまの一生と教えを伝えるものであった。舞台中央に設けられたスクリーンに挿絵や唱えている御詠歌を映し出し、舞台の照明に

も工夫が凝らされていた。ナレーションのなかでは唱える経典についても解説がされ、非常にわかりやすいものとなっていた。「お釈迦さま物語」を考案した中心人物である上総第三教区 寺籍12番 實蔵院住職 金森春光師は「これからこのお釈迦さま物語の完成度もますます上がっていきだろ。ぜひこの試みを広めていって欲しい」とお話しくださったが、その完成度はすでに高いものであった。

御詠歌オペラ開催一覧

No.	開催年度	主催団体・開催教区・開催団体	備 考
1	平成24	教化センター	運営セミナー
2	平成25	埼玉第十・十一・十二	檀信徒教化推進会議
3	平成25	東京北部	檀信徒教化推進会議
4	平成25	宮城	遍照講宮城支部主催
5	平成25	栃木南部	檀信徒教化推進会議
6	平成26	京阪	檀信徒教化推進会議
7	平成26	栃木中央	檀信徒教化推進会議
8	平成26	遍照講	全国奉詠川崎大師大会
9	平成26	教化センター	檀信徒研修会
10	平成26	遍照講	遍照講指導師範会議
11	平成27	愛媛	檀信徒教化推進会議
12	平成27	上総第三	檀信徒教化推進会議
13	平成27	教化センター	寺庭婦人連合会総会
14	平成28	新潟第二	檀信徒教化推進会議
15	平成28	岩手	檀信徒教化推進会議
16	平成28	福島第三	檀信徒教化推進会議
17	平成28	栃木青年会	関東八十八ヶ所靈場会大会
18	平成28	教化センター	東京多摩教区寺庭婦人連合会総会
19	平成29	安房第二	檀信徒教化推進会議
20	平成29	教化センター	檀信徒研修会
21	平成29	新潟第二	檀信徒教化推進会議
22	平成29	智山青年連合会	真言宗十八本山お砂踏み
23	平成30	福島第一	檀信徒教化推進会議
24	平成30	高知	檀信徒教化推進会議
25	平成30	上総第三	檀信徒教化推進会議

5. 今後の可能性

当初われわれが「御詠歌オペラ」を考案した際に想定していたことのひとつに、上演を観た参加者に対して御詠歌に親しみをもっていただくということがあった。しかし上総第三教区の事例では、御詠歌の講員である檀信徒とともにひとつの上演を作り上げていることにも着目したい。「お釈迦さま物語」の内容自体もさることながら、この上演を作り上げるなかで教師と檀信徒らが深く関わり合っていることに私は深い感銘を受けた。入退場のタイミングや所作のひとつひとつを合わせるなかに「一緒に良いものを作り上げよう」という一体感が

そこには漂っていた。この一体感をもって教師と檀信徒が活動するという効果は、他の教化活動にはみられない御詠歌オペラの特徴かもしれない。

上総第三教区の事例にみるように、御詠歌オペラは教区において独自の展開をみせ始めている。物語性のある御詠歌を主軸として、声明や法話でシナリオを構成する方式は「お大師さまのご生涯」も「お釈迦さま物語」も共通するであろう。上総第三教区の例は「お大師さまのご生涯」が教区独自のオリジナリティを込め正当に派生したように思われる。今後同じような方式で「興教大師のご生涯」という御詠歌オペラも教区にて展開されるかもしれない。



上総第三教区 檀信徒教化推進会議「法楽紙芝居 お釈迦さま物語」公演の様子

4 「教化を考える会」について

智山教化センター 所員 阿地 隆哲

1. はじめに

「教化を考える会」は、智山教化センター所員を中心に、現代における社会問題や教化活動を展開する上での必要な情報や、知見を得るために宗内外からテーマに沿った講師を招き、講義ならびに意見交換形式で行われている研究会である。

平成30年度は、全7回に亘って開催された。その各回のテーマと講師については、次のようになる。第1回「求められるお寺の在り方、寺院に関する満足度」大和証券 佐藤泰之氏、教化委員／九州教区東漸寺住職 奥島正就師、上総第四教区勝覚寺住職 小杉秀文師。第2回「がん～その不安と思いに寄り添うために～」国立癌研究センター中央病院精神腫瘍科長 清水研氏、一般社団法人 キャンサー・ペアレンツ代表 西口洋平氏。第3回「現場の動向から知る葬儀の変化」全日本葬祭業協同組合連合会専務理事 松本勇輝氏。第4回「臨床宗教師」智山教化センター専門員 倉松俊弘師、埼玉第一教区東養寺住職 高橋一晃師。第5回「情報発信と危機管理」智山教化センター専門員 吉田住心師。第6回「寺院と幸福度」中央大学商学部准教授 窪田康平氏。第7回「ウェルビーイング」NTTコミュニケーション科学基礎研究所 渡邊淳司氏。

本稿では、これら平成30年度に開催された「教化を考える会」の中から第3回と第5回を取り上げ、その内容について報告する。

2. 第3回「現場の動向から知る葬儀の変化」

平成30年9月14日(金)に行われた第3回は

近年、めまぐるしく変化する葬儀業界の中で、檀信徒が住職や葬祭業者に対して、どのような感情を抱いているのかなど、普段私たちには届かない現場の声を知り、それに対して寺院側に何ができるかを考えるために、全日本葬祭業協同組合連合会（以下、全葬連）専務理事である松本勇輝氏にお話を伺い、意見交換を行った。全葬連とは昭和31年に発足し、昭和50年の通産省（当時）認可により本格始動し、葬祭業という職業が社会的に必要不可欠であること、その地位の向上、競争力強化による経営の安定、葬祭文化の発展を掲げ、平成30年5月現在では47都道府県57事業協同組合1,340社が加盟する、日本最大の葬祭事業者の組織である。

松本氏によれば、葬儀のスタイルが従来の型から大きく変化した原因は多岐に亘るが、その1つとして人口動態や社会状況によるものがあげられる。少子化により、一人っ子どうしが結婚した場合、自分の両親、配偶者の両親、さらにはその祖父母まで面倒をみるという、体力的、精神的、そして金銭的負担の増加という社会状況があり、身内一人の「死」にかける金額について否が応でも見直さなければならない、という厳しい現状がある。その結果が、「家族葬」や「直葬」につながり、或は「遺骨」や「墓」の問題にも及び、儀式や風習を軽んじる傾向へ拍車をかけていると思われる。

また、葬儀のスタイルが変化したことは、葬祭業が少額の初期投資や平易な手続きにより、比較的簡単に事業を始められることも関係している。人口動態のデータによると、今後20年程は事業に将来性があること

が明らかであり、利益のみを目的とした業者も存在する。

全葬連や国民生活センターの相談窓口に寄せられる声の中には「インターネットの宣伝をみて葬儀を依頼したが、ホームページに掲載されている内容と異なり3倍以上の料金を請求された。また、葬儀の対応も非常に悪く後悔している。支払い後、納得いかないので電話をしたところ、つながらなくなっていた。故人の父親に申し訳ない」という相談が寄せられている。全般的に、全葬連に寄せられる苦情や意見をみると、真面目に喪家と向き合おうとしていない様子が見え隠れしている。

松本氏は、一部の伝統を略した葬儀社が、安価で信頼のおけないサービスを行ない、人々の葬祭文化への不理解を促し、「命の大切さや個人を敬う気持ちが希薄になっている」と訴え、寺院と葬儀社の連携を深め、葬祭文化を正しく広めなければならないと講じられた。

また、葬儀社の意見をまとめた「寺院の皆様へお伝えしたいこと」では、通夜前後の説法などを機に、普段から檀信徒や地域の方々とコミュニケーションをとり、葬祭文化について考えてもらうことが大切ではないか、という意見が寄せられていることも報告された。

3. 第5回「情報発信と危機管理」

平成30年12月19日(水)に開催された第5回では、教化センター専門員・吉田住心師を招き、主に情報の取捨選択（メディアリテラシー）やインターネット上において、批判が殺到して收拾がつかなくなる、いわゆる“炎上”的対処法などについて話し合われた。

吉田専門員は、まず前提としてインターネットや、テレビをはじめとするマスメディアはある程度インパクトが必要であり、極論やセンセーショナリズムを好み、大げさ

な報道をする傾向がある。強調された情報は個人が発信者となるソーシャルネットワーキングサービス（SNS）を経由することで、信憑性を欠き、人々は正しい判断ができなくなると主張された。

受信した情報の取捨選択（メディアリテラシー）を正しく判断するために私たちができるとして、情報の発信元の確認や過度に人の感情を煽る媒体を避け、特定の人物・集団への攻撃には加わらないなどの具体的なポイントが挙げられた。また、発信する側として、もし“炎上”した場合においての対応では、情報の透明性を高め、常に公明正大であること、誤解を解くためのアナウンスはネット上でしっかりと発する、騒ぐ人ではなく第三者の目を常に意識することなどが挙げられた。

根拠のない情報を盲信すると、たとえ善意や正義感であっても、周囲を傷つけ、社会を間違った方向へ導く原因となる恐れがある。信頼のおける寺院や僧侶（個人）であるためにも、情報の受発信に特段の注意を要する時代である。

4. おわりに

現代社会は個人化、多様化といわれ、複雑化しているように感じる。寺院・教会は、社会から孤立した存在ではなく、現代社会に存立する寺院・教会なのだから、情報や動向には常に注意を払い更新し、さまざまな視点から現代社会を知り、捉えていくことが必要不可欠なのではないだろうか。

このように「教化を考える会」は、招聘した講師の研究から現代の社会問題の本質を知り、その問題の影響を精査し、それを受け智山教化センターとしてどのように宗内寺院・教会、住職、教師へ発信し、共有していくかを考え、さらなる教化活動の展開へつなげる機会となっている。今後も「教化を考える会」で得た情報や知見をもとに、研修会や各種出版物で発信していきたい。

IV その他

1. 購入図書

【一般図書・雑誌・新聞】

書籍名	編集者名	発行所	書籍名	編集者名	発行所
ウェルビーイングの統計論	ラファエル・A・カルガオ、 ドリアン・ピーターズ	ビー・エヌ・エヌ新社	進化するマインドフルネス	飯塚まり	創元社
エンディングへの備え	中外日報社	中外日報社	葬送の倫理	久野昭	紀伊國屋書店
遺贈寄付ハンドブック [改訂版]	鶴尾雅路、青藤弘道、芝池俊輔、 梅本和、山元洋二、鶴尾雅路他	日本ファンドレイジング協会	日本・中国の文様事典	早坂優子	視覚デザイン研究所
寄付白書2017	寄付白書発行研究会	日本ファンドレイジング協会	日本人は先祖をどう祀ってきたか	武光誠	河出書房新社
現代日本の葬送と墓制	鈴木岩弓、 森謙二 (編)	吉川弘文館	日本文様事典	清水勝	河出書房新社
高野山家宝暦・宿曜暦		高野山出版社	仏教看護・ピハーラ11号	日本仏教看護・ ピハーラ学会	日本仏教看護・ ピハーラ学会
社会的インパクトとは何か	マーク・J・エプスタイン、 クリスティ・ユーズス	英治出版	「靈魂」を探して	鵜飼秀徳	角川書店

書名・誌名・紙名							
月刊住職	高野山寺報	大法輪	中外日報	地域人	文化時報	仏教タイムス	六大新報

2. 宗内寺院・教会刊行物 寄贈図書・資料

【宗内寺院・教会定期刊行物】

刊行物	寄贈者名	備考
岩槻大師	岩槻大師弥勒密寺	埼玉第四教区寺籍1番
岩手教区だより	岩手教区	
お大師さまとともに	大本山 川崎大師平間寺	神奈川教区寺籍1番
鹿野山一覚記	神野寺	上総第二教区寺籍13番
川崎大師だより	大本山 川崎大師平間寺	神奈川教区寺籍1番
くすのかおり	東漸寺	九州教区寺籍21番
虚空	東覺寺	東京東部教区寺籍28番
千の手	寂光院	東海教区寺籍35番

刊行物	寄贈者名	備考
高尾山報	大本山 高尾山薬王院	東京多摩教区寺籍1番
高幡不動尊	別格本山 高幡山金剛寺	東京多摩教区寺籍2番
智光	大本山 成田山新勝寺	下総印旛教区寺籍1番
成田山法光	成田山大阪別院 明王院	京阪教区寺籍39番
微咲	興性寺	岩手教区布教師会発行
宝蓮寺通信	寶蓮寺	栃木南部教区寺籍26番
ボサツの声	延命院	東京西部教区寺籍5番

【宗内寺院・教会刊行物(含、宗内寺院関係寄贈分)】

刊行物	発行所	寄贈者名
折り折りの記	大本山高尾山薬王院	大本山高尾山薬王院
紀要 3号	川崎大師教学研究所	川崎大師教学研究所
勝憲和尚を偲んで シャッターを押す指	東覺寺	東覺寺
新編成田山史	大本山成田山新勝寺	大本山成田山新勝寺
盛海画帖	東覺寺	東覺寺

刊行物	発行所	寄贈者名
大日経住心品 読み下し経典	清涼寺	清涼寺
東覺寺 小史	東覺寺	東覺寺
成田山布教資料 第9集	大本山成田山新勝寺	大本山成田山新勝寺
密巖流詠歌と譜 解説書	眞言宗智山派宗務庁	密巖流遍照講
われら花のごとく生きて 高橋新吉揮毫集	東覺寺	東覺寺

【他宗派定期刊行物】

刊行物	寄贈者名
あんじやり	親鸞仏教センター
池上	池上本門寺
おかげさま	妙心寺派教化センター
近現代『教行信証』研究検証プロジェクト研究紀要	親鸞仏教センター
現代と親鸞	親鸞仏教センター
親鸞仏教センター通信	親鸞仏教センター
正法輪	妙心寺派教化センター

刊行物	寄贈者名
ちくまん	大本山大覺寺
花園	妙心寺派教化センター
平成30年度推進のしおり	妙心寺派教化センター
平成31年己亥歳三寶曆	総本山善通寺
へんじょう	総本山善通寺
法華コモンズ通信	法華コモンズ仏教学林

【他宗派刊行物】

刊行物	発行所	寄贈者名
KUKAI—空海密教の宇宙—1号	高野山真言宗 総本山金剛峯寺	高野山真言宗 教学部教学課
現代語 唯信鈔文意 親鸞思想を読み解く	朝日新聞社	親鸞仏教センター
高野山大学密教文化研究所紀要 31号	高野山大学 密教文化研究所	高野山大学 密教文化研究所
『淨土真宗本願寺派葬儀規範』解説 淨土真宗の葬送儀礼	本願寺出版社	藤丸智雄 (淨土真宗本願寺派總合研究所副所長)

刊行物	発行所	寄贈者名
淨土真宗本願寺派葬儀規範	本願寺出版社	藤丸智雄 (淨土真宗本願寺派總合研究所副所長)
禅文化 第251号	禅文化研究所	禅文化研究所
『秘藏寶論』の研究 第三分冊	高野山大学 密教文化研究所	高野山大学 密教文化研究所

【関係機関・団体定期刊行物】

刊行物	寄贈者名
ARCO通信	りす俱楽部事務局
ICU宗教音楽センター会報	国際基督教大学宗教音楽センター
ケ・セラ・セラ	オトワレストラ
寺社Now	全国寺社観光協会

刊行物	寄贈者名
全仏	全日本仏教会
びっぱら	全国青少年教化協議会
りす俱楽部	りす俱楽部事務局

【大学・関係機関・関係者】

刊行物	発行所	寄贈者名
逸見梅栄コレクション画像資料	アジア図像 集成研究会	金沢大学人文学部比較文化研究室 森雅秀
神さまが教えてくれた迷いを すっきり消す方法	ダイヤモンド社	悟東あすか
高野山大学密教文化研究所紀要 31号	高野山大学 密教文化研究所	高野山大学 密教文化研究所
子どもを持つ親が病気になった時に読む本 伝え方・暮らし方・お金のこと	創元社	キャンサペアレソ代表 西口洋平
幸せを呼ぶ龍神なぞり絵	扶桑社	悟東あすか
死生学・応用倫理研究 2018年	東京大学大学院 人文社会系研究科	死生学・応用倫理センター
チャトラバティ・シヴァジ博物館の ヒマラヤ美術	アジア図像 集成研究会	金沢大学人文学部比較文化研究室 森雅秀
2017年度研究報告書	龍谷大学 アジア仏教文化研究センター	龍谷大学 アジア仏教文化研究センター

刊行物	発行所	寄贈者名
ニューズレター	龍谷大学 アジア仏教文化研究センター	龍谷大学 アジア仏教文化研究センター
『秘藏寶論』の研究 第三分冊	高野山大 学密教文化研究所	高野山大学 密教文化研究所
Fukujin 19号	明月堂書店	福神研究所
ふるえ	日本電信電話株式会社	渡邊淳司
平成29年度成田山文化財団年報	成田山書道美術館	成田山書道美術館
ムディター 新春号	ムディター	満辺了
モノ学の冒険 Vol.1 ~ Vol.15	創元社	渡邊淳司
私、ひとりで死ねますか 支える契約家族	日本法令	松島如戒

(敬称略)

智山教化センターの役割と活動

智山教化センターは、真言宗智山派教化規程第二条「本宗の教化活動を効果あらしめるために、智山教化センターを設置する」の規定に基づき、真言宗智山派の教化を推進し、実動させるサポート機関です。

主な活動としては、

- ①教化推進施策として真言宗智山派が掲げる「教化目標（わたしたちの目標）」の策定。
- ②真言宗智山派で主催するさまざまな研修会の企画・立案と運営協力。また、教区で主催する「教区教化研究会」「檀信徒教化推進会議」などの開催協力。
- ③教師・寺庭婦人を対象とした教化情報誌の企画・編集。檀信徒に真言宗智山派の教えや「教化目標（わたしたちの目標）」などを知っていただくための教化誌の企画・編集。
- ④宗教文化全般、宗内寺院や他宗派の教化活動に関する情報収集や調査研究。などを行っています。

■ 智山教化センター構成員（平成30年4月～平成31年3月）

役職名	氏名	就任年月日	教区	寺院名
センター長	山川 弘巳	H27. 4.1	東京南部	圓應寺
常勤所員	倉松 隆嗣	H21. 4.1	栃木南部	観照院
	鈴木 芳謙	H21.12.1	東京東部	香華院
	上村 正健	H27. 4.1	埼玉第四	西光寺
	伊藤 尚徳	H27. 4.1	安房第一	極楽寺
	中嶋 亮順	H29. 4.1	埼玉第十二	正法寺中
	花木 義賢	H29. 4.1	東京北部	青蓮寺
非常勤所員	磯山 正邦	H21. 4.1	東京東部	正福寺中
	塩地 義法	H28. 4.1	新潟第一	妙法院
	島 玄隆	H29. 6.1	東京多摩	金剛寺中
	阿地 隆哲	H30. 9.1	福島第一	華藏院中
専門員	佐脇 貞憲	H15. 4.1	京阪	海住山寺
	北尾 隆心	H9. 4.1	京阪	最勝寺
	牧 宥恵	H11. 4.1	長野南部	照光寺中
	高野 智哉	H17. 4.1	佐渡	寶藏寺
	佐藤 雅晴	H13. 4.1	宮城	岩誓寺
	倉松 俊弘	H17. 4.1	栃木南部	薬王寺
	高岡 邦祐	H29. 4.1	埼玉第五	寶性院
	吉田 住心	H24. 9.1	埼玉第九	地藏院
	原 豊壽	H25. 4.1	東京多摩	福傳寺
	佐藤 芳典	H29. 4.1	東京多摩	東福寺
主事	萩原 輝浩	H27. 4.1	埼玉第七	大光院
	佐伯 隆範	H27. 4.1	神奈川	吉祥寺
	大槻 良栄	H27. 4.1	上総第三	金剛寺
雇員	山口 あかり	H30. 6.1	埼玉第六	總願寺中

年報 第23号（平成30年度）

令和元年8月1日 発行
発行人 真言宗智山派宗務総長 芙蓉良英
編集 智山教化センター
発行所 〒605-0951
京都市東山区東大路通り七条下ル東瓦町964
総本山智積院内 真言宗智山派宗務庁
電話 075-541-5361(代表)
FAX 075-541-5364
印刷所 株式会社ディー・エイ・ティ・コーポレーション